広島市の文化財第13集

空長古墳群
発掘調査報告書

1978. 3

広島市教育委員会

序　　文

広島市は最近都心部から郊外への人口流出が盛んで，自然環境に恵まれた郊外の丘陵地帯では，大規模な宅地造成が進められ，
そこに分布する埋蔵文化財の現状保存を困難なものにしています。

昭和５２年の秋に，広島市教育委員会が発掘調査を行いました広島市祇園町大字西山本の空長古墳群も開発予定地の丘陵上に位置していました。

本格的な発掘調査は，地元祇園町では初めてのこととあって町内の関心は高く，発掘作業から出土品の整理，祇園公民館での調査報告会に至るまで，多数の方々の協力が得られたことは大変幸せでした。

今回の発掘調査において広島市にとって，新たな遺構，貴重な出土品の発見もあり，大きな成果をおさめることが出来ました。

本書が地域における古代史解明の手がかりとなり，更に郷土理解を深めるための一つの機縁となるよう願ってやみません。

おわりに今回の調査に対し，ご指導を賜りました諸先生方および協力くださった地元の多くの方々に厚くお礼申し上げます。

昭和５３年３月

広島市教育長　富　永　治　郎

例　　言

1　この報告書は宅地開発工事に伴い，昭和５２年１０月から５３年１月にかけて実施した空長古墳群の発掘調査報告である。

2　発掘調査は泰久興産株式会社から委託を受けて，広島市教育委員会が実施した。

3　本書の執筆は石田彰紀が担当し，有谿盈雄，柳川康彦がこれを編集した。

4　本書掲載の航空写真は，はにわ会会員井手三千男氏より提供を受けた。

5　本書に掲載した地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の２５，０００分の１地形図を複製したものである。（承認番号）昭和５３年複，第５８号

目　　次

第１章　序　　説
　１．発掘調査に至るまで 1
　２．調査の経過 1

第２章　古墳群の位置と環境 4

第３章　第１号墳
　１．古墳の構造 7
　２．主体部の構造 7
　３．遺　物 9
　４．小　結 14

第４章　第２号墳
　１．古墳の構造 18
　２．主体部の構造 18
　３．遺　物 18
　４．小　結 23

第５章　第３号墳
　１．古墳の構造 24
　２．主体部の構造 24
　３．遺　物 25
　４．小　結 25

第６章　第４号墳
　１．古墳の構造 26
　２．主体部の構造 26
　３．遺　物 26
　４．小　結 29

第７章　須　恵　器 30

第８章　結　　語 36

図　版　目　次

巻首図版　空から見た空長古墳群
図版　１　１．空長古墳群遠景（中央↓印）
　　２．空長古墳群近景
図版　２　１．空長古墳群全景（北より）
　　２．空長第１号墳全景（南より）
図版　３　１．空長第１号墳全景
　　２．空長第１号墳主体部全景（表土を除いたところ）
図版　４　１．空長第１号墳主体部全景（遺物出土状態）
　　２．空長第１号墳主体部内鉄剣出土状態
図版　５　１．空長第１号墳主体部内蛇行剣身出土状態
　　２．空長第１号墳主体部内金銅製三輪玉，有孔円板出土状態
図版　６　１．空長第１号墳主体部の横口部
　　２．空長第１号墳墳丘全景
図版　７　１．空長第２号墳全景（調査前）
　　２．空長第２号墳全景（調査後）
図版　８　１．空長第２号墳主体部全景（表土を除いたところ）
　　２．空長第２号墳主体部（調査後）
図版　９　１．空長第２号墳主体部内遺物出土状態
　　２．空長第２号墳墳丘全景
図版１０　１．空長第２号墳周濠内（南東部）須恵器出土状態
　　２．空長第２号墳墳丘裾（西側）須恵器出土状態
図版１１　１．空長第３号墳全景（調査前）
　　２．空長第３号墳全景（調査後）
図版１２　１．空長第３号墳主体部全景
　　２．空長第３号墳主体部残存状態
図版１３　１．空長第４号墳全景（調査前）
　　２．空長第４号墳全景（調査後）
図版１４　１．空長第４号墳主体部全景
　　２．空長第４号墳主体部内直刀出土状態
図版１５　１．空長第４号墳主体部の横口部積石状態
　　２．空長第４号墳周濠（西側）
図版１６　第１号墳出土遺物
図版１７　第２号墳・第４号墳出土遺物
図版１８　空長古墳群出土須恵器

挿　図　目　次

第　１図　空長古墳群の位置と周辺の主要古墳 ..... 折り込み 1
第　２図　祇園町長束出土倣製鏡および伝光見寺跡出土鐙瓦拓本 6
第　３図　遺跡地形実測図 ..... 折り込み 2
第　４図　空長古墳群実測図 ..... 折り込み 3
第　５図　第１号墳石室実測図 8
第　６図　第１号墳遺物分布図 9
第　７図　鉄剣実測図 10
第　８図　三輪玉・有孔円板・ガラス玉実測図 11
第　９図　鉄器実測図 13
第１０図　第２号墳遺物分布図 18
第１１図　第２号墳石棺実測図 19
第１２図　直刀実測図 20
第１３図　鉈・鎌・刀子・鉄鏃実測図 22
第１４図　第３号墳石棺実測図 24
第１５図　第４号墳石室実測図 27
第１６図　第４号墳遺物分布図 28
第１７図　直刀実測図 28
第１８図　空長古墳群出土須恵器（坏・高坏・直口壷）実測図 30
第１９図　空長古墳群出土須恵器（中型甕）実測図 31

付　表　目　次

付表１　太田川下流域における前期・中期の古墳地名表 5

付表２　第１号墳出土ガラス玉計測表 12

付表３　金銅製三輪玉出土古墳地名表 15

付表４　広島県有孔円板出土古墳地名表 16

付表５　空長古墳群出土須恵器一覧表 32

第１章　序　説

１．発掘調査に至るまで

広島市教育委員会では，昭和５１年９月，泰久興産株式会社より広島市祇園町西山本地区の宅地開発予定地内にある空長古墳群の扱いについて協議を受けた。これについて広島市教育委員会では，県教育委員会および泰久興産株式会社と再三にわたり協議を重ねた。しかし，結局のところ古墳群が開発予定地内のあることから，設計変更は無理であり，記録保存もやむなしとの判断がされ，昭和５２年初夏を目標に広島市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

昭和５２年４月より当該発掘調査の準備に取りかかったが，諸般の事情により発掘調査の実施が約５ヶ月も遅れ，１０月５日より約２ヶ月の予定で調査を開始した。

なお，発掘調査の対象となった空長古墳群の内容は，当初箱式石棺３基と予想されていたものである。

２．調査の経過

（１）　調査団の組織

発掘にあたっては下記のメンバーで臨んだ。

調査委託者　泰久興産株式会社
調査主体　広島市教育委員会
調査担当係　広島市教育委員会社会教育部社会教育課文化財係
調　査　者　成田　鉞雄（社会教育課長）
有谿　盈雄（社会教育課文化財係長）
箕浦　興宏（社会教育課庶務係主査）
柳川　康彦（社会教育課文化財係主事）
石田　彰紀（社会教育課文化財係主事，調査主任）
浅川　伸二（社会教育課庶務係主事，事務担当）
調査補助員　内田　義人（祇園町長束地区　・発掘作業）
大下　順三（　〃　南下安地区　〃　）
小笠原　誠（　〃　〃　〃　）
倉前　敏磨（　〃　東山本地区　〃　）
河野　悟（祇園町東山本地区・発掘作業）
谷田　芳夫（　〃　〃　〃　）
為定　照男（　〃　長束地区　〃　）
浜田　守三（　〃　〃　〃　）
堀口　龍彦（　〃　南下安地区　〃　）
養祖千代人（　〃　東山本地区　〃　）
北村　澪子（　〃　長束地区　・整理作業）
坂尾　昭子（　〃　〃　〃　）
島　圭子（　〃　〃　〃　）
寺下　節子（　〃　〃　〃　）

広安　佳子（　〃　　〃　　〃　）
名井　熙子（　〃　　〃　　〃　）

なお，このほか調査委託者である泰久興産株式会社，地元祇園町の田口為雄氏，早田正照氏，三篠町の三野丈一氏および祇園公民館谷田稔夫館長ほか職員の方々には調査を円滑に進めるために多大な配慮をいただいた。また，発掘調査の実施と報告書の作成にあたっては，国学院大学文学部考古学研究室，広島大学文学部考古学研究室，広島県教育委員会文化財課，広島市文化財審議会委員松崎寿和，広島市立工業高校教諭善入義信，可部郷土史研究会会員松浦譲二の諸氏から教示を受けた。ここに記して謝意を表したい。

（２）　調査の経過

調査の経過については下記のとおり略記するにとどめたい。

昭和５２年	
９月　１日～　９月３０日	発掘調査の準備
９月３０日	発掘関係者打合せ（於　祇園公民館）
１０月　５日	発掘調査開始
１０月　５日～１１日	雑木伐採
１０月１２日～１５日	地形測量
１０月１４日～２１日	トレンチ設定・掘り下げ
１０月２４日～	第１号墳調査
１０月３１日～	第２号・第３号墳調査
１１月１１日～	第４号墳調査
１１月２１日～１２月１９日	発掘調査中断
１２月２０日	調査再開（補足調査）
１２月２７日	調査終了（補足調査）
昭和５３年	
１月１８日	整理作業・報告書作成開始（於　祇園公民館）
１月２７日	第２号墳の主体部を祇園公民館の中庭へ移転復元
２月　５日	発掘成果報告会（於　祇園公民館「ぎおんひろば」）
３月	報告書刊行

第２章　古墳群の位置と環境

空長古墳群は，広島市祇園町大字西山本字空長にあって，標高３５６．０ｍの景浦山の北端から派生した小丘陵の尾根上に位置している。この丘陵は比較的なだらかで，遺跡の最高所の標高は９２．５ｍ，眼前に祇園町とその周辺が一望できて，古墳築造者の意図が当然のごとく感じられる。

古墳群は４基の円墳からなり，それぞれ南から１・４・２・３号墳と名付けた。このうち，前二者は竪穴系横口式石室を内部主体とし，後二者は箱式石棺を内部主体とするものである。

空長古墳群のある山本地区は，祇園町の西に大きく湾入した形で，太田川をはさんで東の戸坂町と対峙する。太田川は往古よりしばしばその流路を変えており，現在でいうところの古川は，その一旧流である。

ところで，この太田川は古代においては安芸・佐伯両郡の郡界をなしており，祇園町東原・西原および戸坂町が倭名類聚鈔にみえる安藝郡幡良郷，祇園町祇園，山本および長束の一帯が佐伯郡伊福郷，桑原郷に比定される地域であり，現在なお，航空写真や地形図等により条理地割と考えられる方格状土地区画を認めることができる。

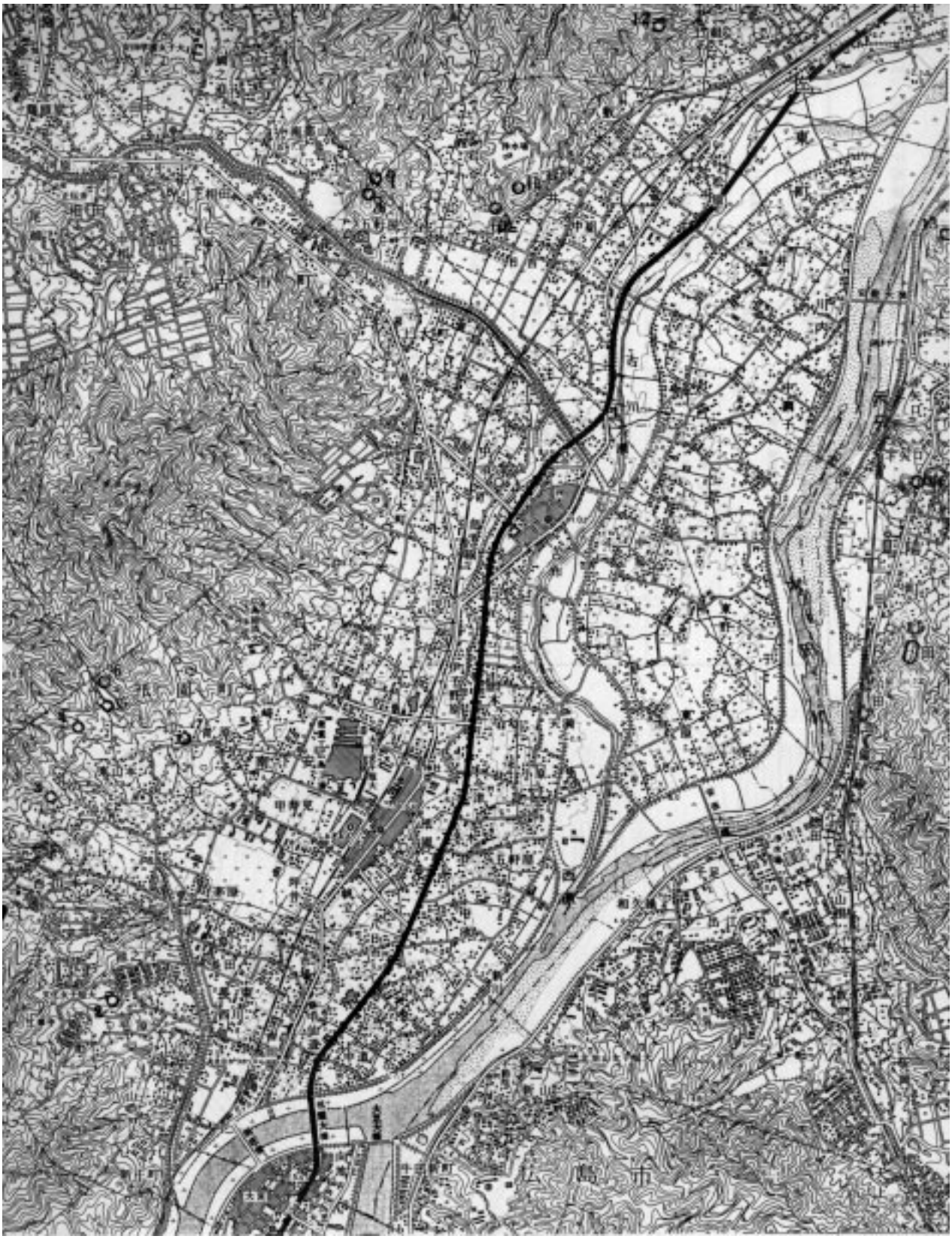
さて，昭和３年土取り工事中に発見され，獣形鏡や鉄鉾など多数の遺物を出土した東山本の三王原古墳は，空長古墳群の北東約１．４ｋｍの丘陵上にある。この三王原古墳は河原石積みの竪穴式石室を内部主体とする前半期の古墳（円墳？）として知られ，その築造の時期は五世紀中葉とされている。また，空長古墳群の南東約０．８ｋｍの長束地区広島文化女子短期大学敷地内からは，学校用地の造成工事中に倣製三角縁神獣鏡が発見されている。（第３図）この倣製三角縁神獣鏡は，発見者に言によれば若干の玉類とともに箱式石棺内に埋置されていたといわれるものの，出土状況その他の詳細は不明である。このほか，山本地区では武田山南山麓の浄円寺古墳群（３基）・部谷山古墳群（２基）・上組古墳などがあげられるが，これらはいずれも横穴式石室を内部主体とする円墳である。

以上，空長古墳群に近接する山本地区周辺の古墳を列記したが，空長古墳群は後で述べるように一応は中期古墳の範疇に属するものと考えてよいようである。そこで，太田川下流域における前期と中期の古墳とされているものをひろいあげてみると付表１のとおりである。

そこで，太田川下流域における前期と中期の古墳とされているものをひろいあげてみると付表１のとおりである。

地図記号	名　　称	所　在	墳形	主体部	副　葬　品	非定時期
(1)	中小田第１号墳	広島市高陽町中小田	円	割石積み 竪穴式石室	三角縁神獣鏡、獣形鏡、鉄剣、鉄刀、鉄斧、勾玉、管玉	4 世紀後半
(2)	神宮山第１号墳	広島市佐東町緑井	円	割石積み 竪穴式石室 3	A 主体　鉄剣、鉄鏃、管玉、小玉 B 主体　内行花文鏡片、管玉、小玉、算盤玉 C 主体　勾玉、管玉、小玉、算盤玉	4 世紀後半
(3)	西願寺 D 第１号石室	広島市高陽町矢口	?	河原石積み 竪穴式石室	鑿、鉄斧	5 世紀初頭
(4)	宇那木山第２号墳	広島市佐東町緑井	?	割石積み 竪穴式石室	画文帯神獣鏡	5 世紀前半
(5)	中小田第２号墳	広島市高陽町中小田	円	割石積み 竪穴式石室	素文鏡、短甲、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、鉄斧、鎌、鍬先	5 世紀前半
(6)	西願寺 D 第２号石室	広島市高陽町矢口	?	河原石積み 竪穴式石室	鉄剣、刀子、鉄斧、鑿、鎌、●	5 世紀前半
(7)	三王原古墳	広島市祇園町東山本	?	河原石積み 竪穴式石室	獣形鏡、鉄剣、鉄鉾、鉄鏃、鉄●、金環、勾玉、管玉、小玉、甲冑片、馬具片	5 世紀中葉
(8)	上小田古墳	広島市高陽町上小田	円	箱式石棺	鉄剣、鉄刀、鉄斧、鎌	5 世紀中葉
(9)	白山第１号古墳	広島市安古市町白山	?	箱式石棺	短甲、鉄槍、鉄刀、鉄斧	5 世紀後半
(10)	白山第２号古墳	広島市安古市町白山	?	箱式石棺	勾玉、管玉、鉄鏃、刀子	6 世紀前半
(11)	神宮山第２号墳	広島市佐東町緑井	?	箱式石棺	鎌、鍬先、須恵器	6 世紀前半

付表１．太田川下流域における前期・中期の古墳地名表
（第１図に含まれない地域のものについては割愛した。）

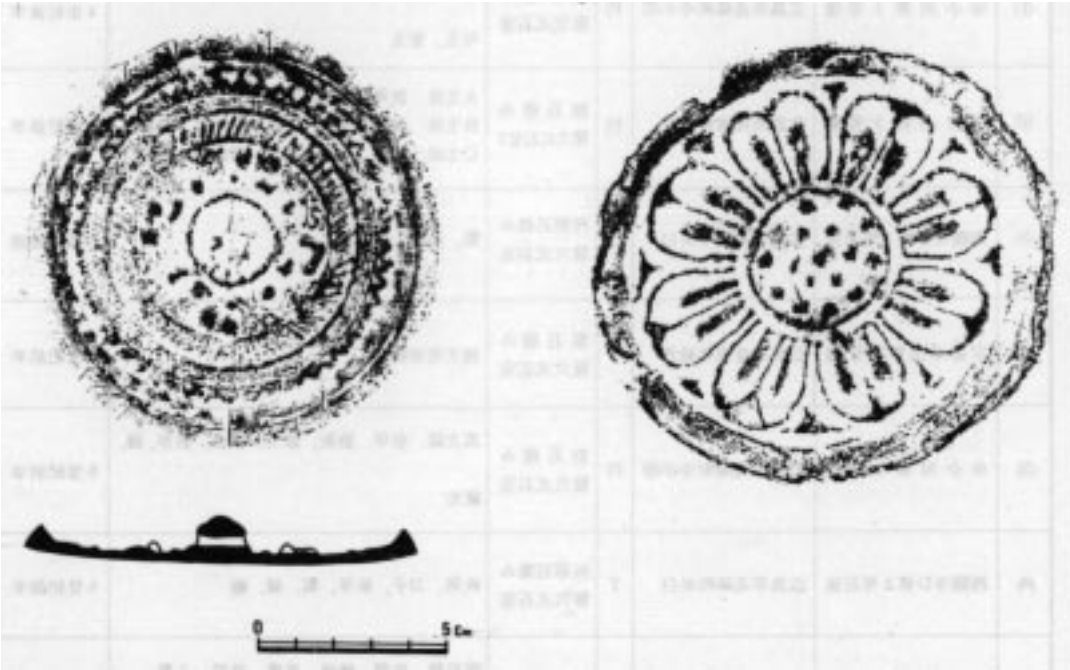


第１図　空長古墳群の位置と周辺の主要古墳

１．空長古墳群　　２．倣製三角縁神獣鏡出土地　３．光見寺跡
４．浄円寺古墳群　　５．上組古墳　　６．部谷山古墳群
７．三王原古墳（7）　　８．白山第１号墳（９）　　９．白山第２号墳（10）
10．神宮山第２号墳（11）　　11．神宮山第１号墳（2）　　12. 宇那木山第2号墳（4）
13．西願寺山墳墓群（3, 6）　　14．上小田古墳　　15．中小田古墳群（1,5）

（　　）内は地名表対照番号を示す。

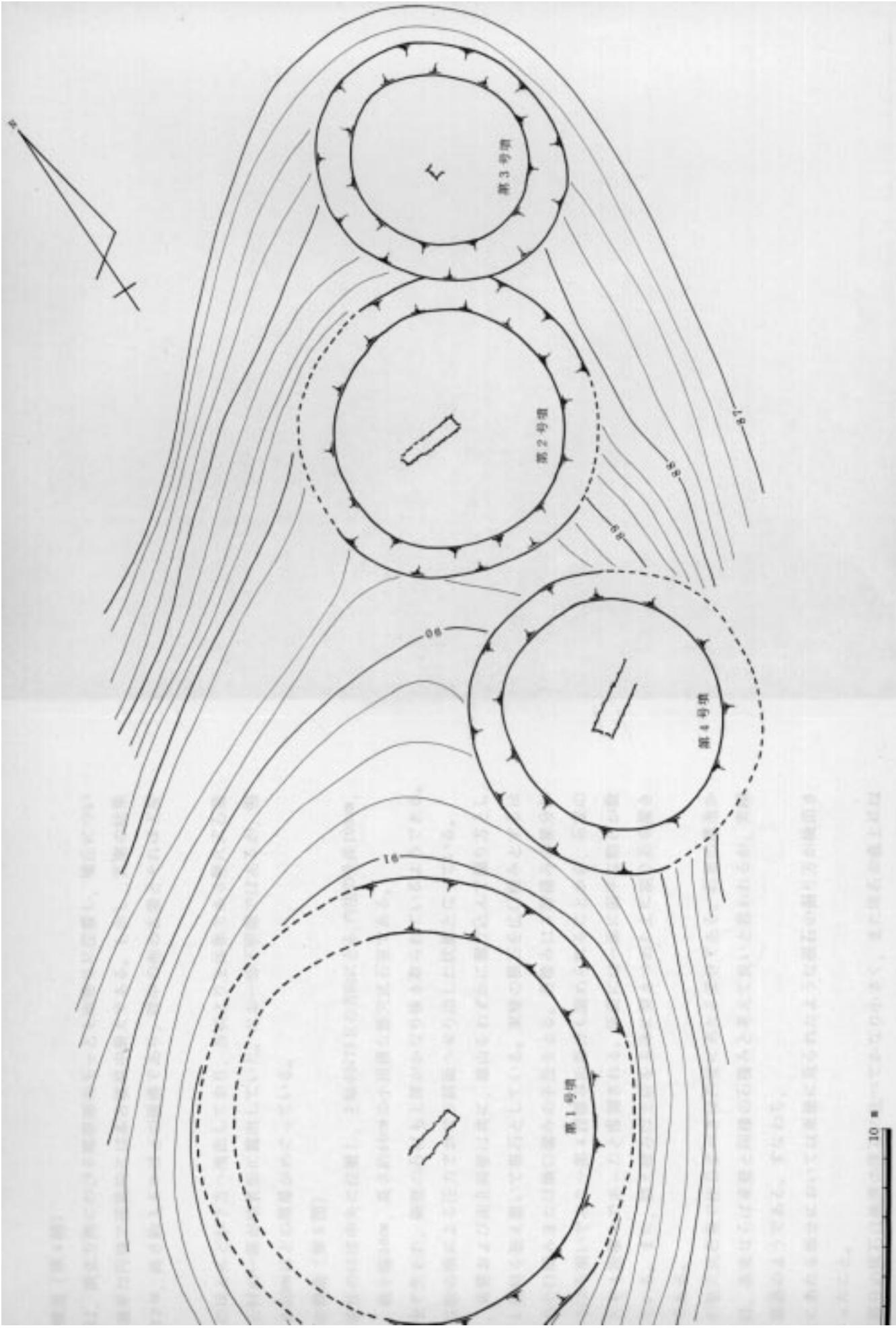
さて，山本地区周辺の古墳の経済的背景が，前述の条理地割の実施を可能たらしめた肥沃な可耕地にあることはいうまでもないことで，祇園町内の古墳が長束地区の一例を除いて山本地区の湾入部に集中していること，また奈良時代の瓦を出土する光見寺跡（第３図２）の存在をも考え合わせるとき，山本地区はきわめて注目すべき地域であることがわかるだろう。



第２図　祇園町長束出土　倣製鏡および伝光見寺跡出土鐙瓦拓本

注１　広島市役所編『新修広島市史　第１巻　通史編』（１９６１）。
　　祇園町教育委員会編『祇園町誌』（１９７０）。
注２　中田　昭「広島市祇園町三王原古墳について」（『芸備』第１集，１９７３）。
注３　福谷昭二「太田川下流域の古墳分布と二・三の問題点」
　　（『広島県立観音高校研究紀要』第６号，１９６９）。
注４　発見者である笠井右治，笠井誠一両氏の教示による。
注５　祇園町教育委員会編『祇園町誌』（１９７０）。

第3図　遺跡地形実測図



第４図　空長古墳群実測図

第３章 第１号墳

１．古墳の構造（第４図）

第１号墳は，南北方向にのびる尾根部のもっとも南寄りに位置し，墳丘についてみれば，墳形は円墳で視覚的には本古墳群中最大である。しかし，実測の結果では，直径１３ｍ，高さ約１．５ｍほどの規模であり，郡中の他の古墳とそれほど変わらない。

封土はそのほとんどが下方へ流出しており，当初より主体部である竪穴式石室を構成する石材の一部が地表面に露出していた。なお一部不明瞭なあるが，幅２００ｃｍ，深さ３０ｃｍほどの周濠がめぐっている。

２．主体部の構造（第５図）

主体部は丘陵のほぼ中央に位置し，主軸をＮ７５Ｅの方向にとる，内法の全長１９５ｃｍ，最大幅５７ｃｍ，最小幅３６ｃｍ，高さ約４０ｃｍの小規模な竪穴式石室である。

天井石は全て失われ，側壁の石材も上部がかなり抜き取られているようである。また，北壁は松の根による圧力でかなり前面へせり出した状態となっている。

構築法は，東壁および南北両壁は共に，地山をわずかに掘り込んで掘り方とし，積み石の第１段目を据え置いてとしている。東壁の根石を広口積みとするほかは，割石の小口積みまたは横積みの手法をとる。石積みは３段積みの部分が多いが、高さは不揃いであり一部４段積みの部分も認められることから,石室の旧状は少なくとも４段積みであったと推測される。床面には一面に扁平な割石が敷きつめられている。また，控え積みは土砂を主体に突きつめた上に割り石を置き並べたものである。

さて，この竪穴式石室では注目すべきは西壁あたる部分である。石室の構造からみて西壁は，本来ならば東壁と同様の石積みと考えて良いと思われるが，実際には異なる構造のようである。すなわち，

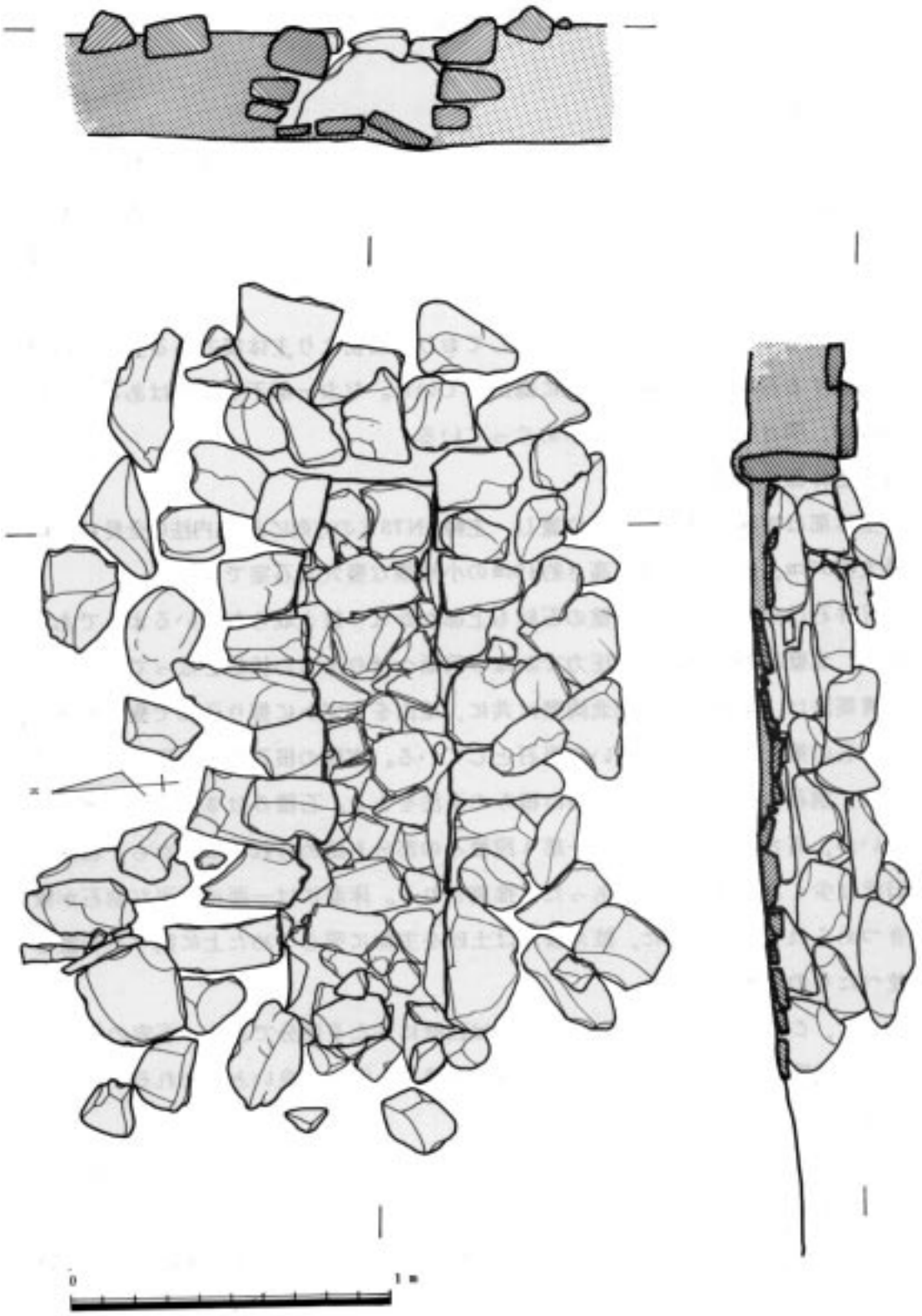
（１） 西壁にあたる部分においては東壁に見られたような根石の掘り方が検出されなかったこと。

（２） 西壁部分の床石は他所の床石に比べてかなり小さく，また床石の直上にはこぶし大の角礫の散乱が見られたこと。

（３） 南北両壁のもっとも西寄りの割り石が内側に突出した状態で地山直上に置いただけのもので２段目以上の積み石をもたないこと。

などの特徴が観察されたが，このことは第４号墳においては更に顕著であり，第４号墳の主体部における西壁は，１０～２０ｃｍ大の角礫と土砂とを積み上げた閉塞構造のものであった。

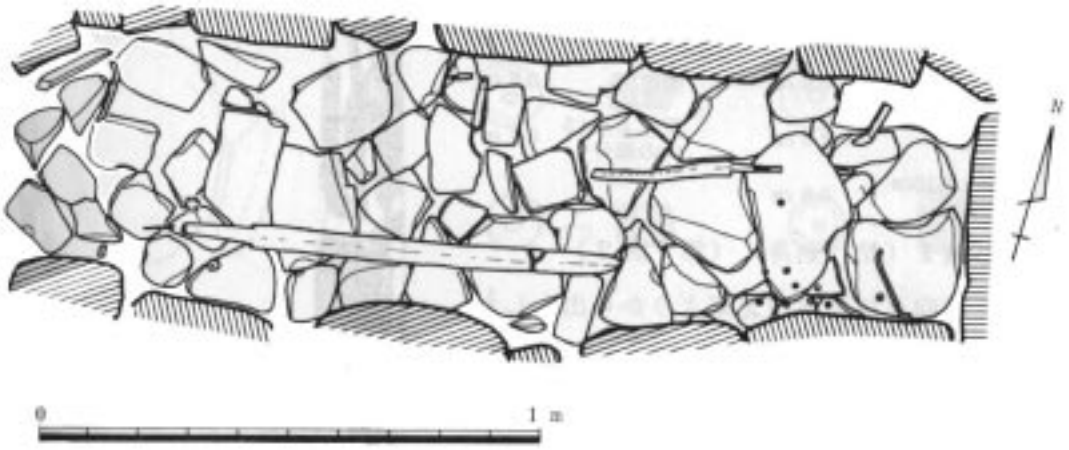
以上の諸点は，本主体部がいわゆる竪穴系横口式石室ではないかということを予想させるものである。



第 5 図　第 1 号墳石室実測図

３．遺物

天井石が抜き取られていたにもかかわらず，本主体部内から出土した遺物は，ほとんど原位置を保った状態で発見された。遺物は石室の東寄りと西寄りの２ヶ所に分けて静置されたようで（第６図），前者には蛇行剣身，ガラス玉，後者には，剣，鉄鏃，三輪玉，有孔円板などが含まれる。このほか，棺具と考えられる鉄製カスガイも出土している。



第６図　第１号墳遺物分布図

以下，それぞれの遺物について詳述しよう。

鉄剣１

鋒を東に向けて，石室の南西よりから出土したこの鉄剣は，現存全長８６．３ｃｍにおよぶ見事な長剣である。鋒をわずかに欠損し，鋒より１５ｃｍのところで折損するが全体的に保存はきわめて良好である。また刀部にはほとんど全面に木鞘の木質が残っている。また茎尻より３．７ｃｍの茎中心線あたりに直径４ｍｍの目釘孔１が認められる。

なお，この鉄剣に関し注目されることは，茎尻に近接して，三輪玉とおぼしき金銅製品１個が出土している点である。

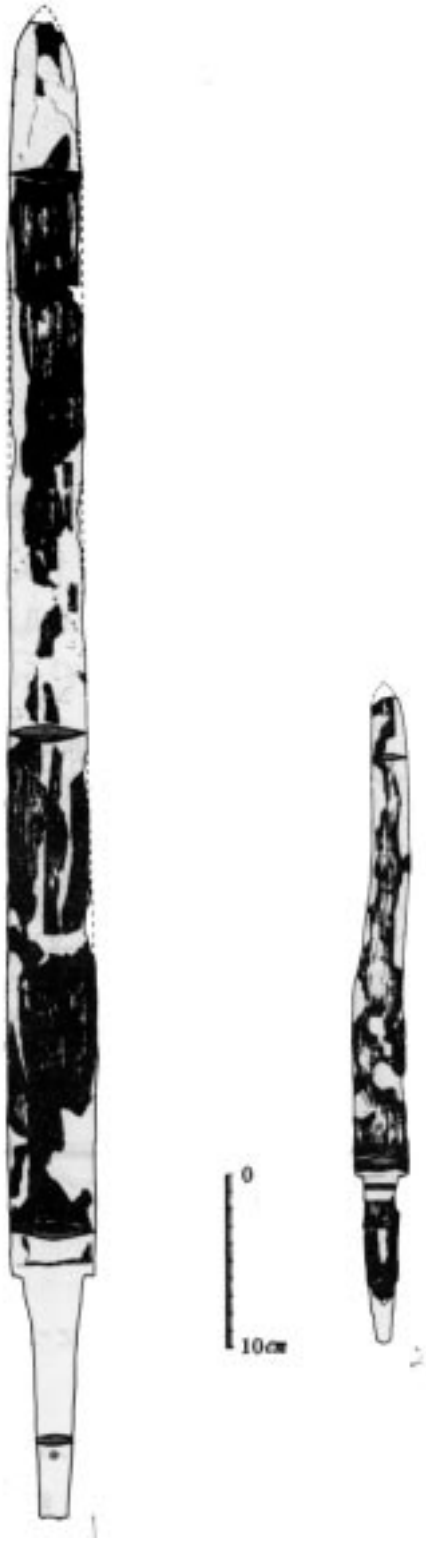
剣の各部の計測値は次のとおりである。

現存全長　８６．３ｃｍ（推定全長　８７．２ｃｍ）

刃部		茎部	
長さ	７２．３ｃｍ	長さ	１４．０ｃｍ
幅		幅	
関部	４．９ｃｍ	関部	３．３ｃｍ
中央	４．４ｃｍ	茎尻より4.5cmの部分	２．０ｃｍ
鋒より10cmの部分	４．０ｃｍ		
厚さ		厚さ	
関部	０．９ｃｍ	関部	０．８ｃｍ
中央	１．０ｃｍ	茎尻より4.5cmの部分	０．７ｃｍ
鋒より10cmの部分	０．８ｃｍ		

鉄剣２（蛇行剣身）（第７図２）

鋒を西向きに石室内北東よりから出土した鉄剣２は形態分類上，蛇行剣身あるいは曲身剣と称される種類のものである。すなわち，剣身はゆるやかなS字を描いて二曲し，鎬を中心として左右不対称をなす。鋒をわずかに欠損するほかはほぼ完形であり，刃部には木鞘の木質が全面に良く残っている。また茎部においても柄木が残り，これに直径０．５～１・０ｍｍの細紐を繁巻きに柄巻きした痕跡が明瞭に観察され，目釘穴は直径２ｍｍほどのものが１ヶ所認められる。



第７図　鉄剣実測図

刃幅および刃厚は関部で最大値を示し，鋒に近くなるにつれ，その値は小さくなっている。

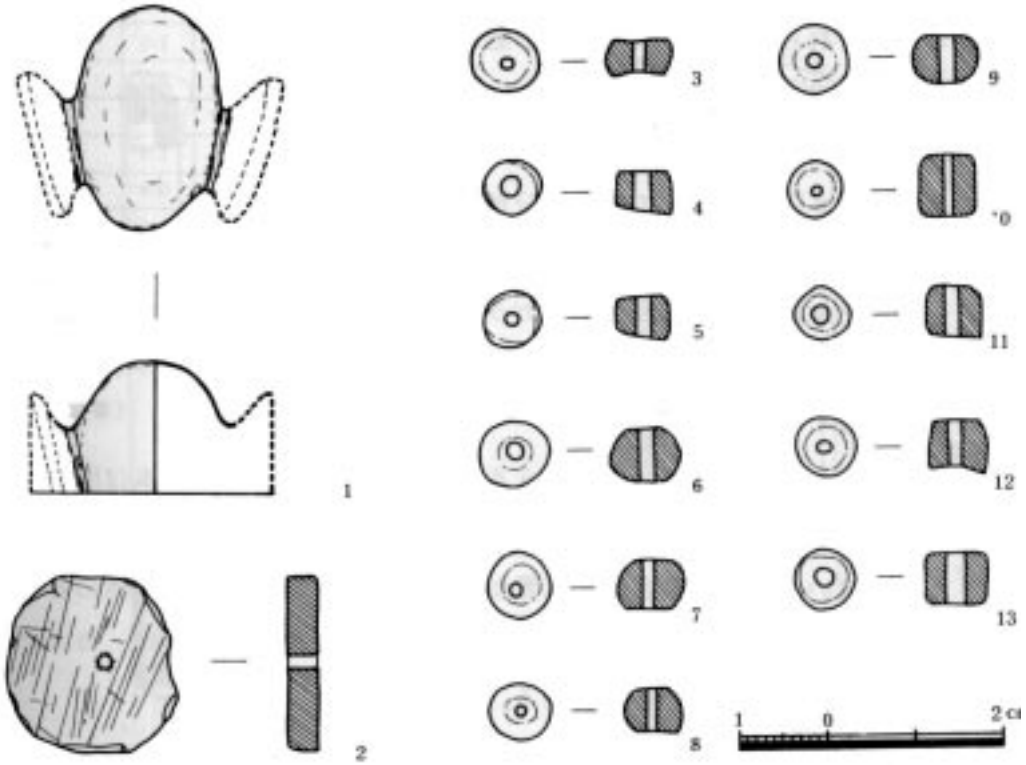
鉄剣の各部の計測値は下のとおりである。

現存全長　　３７．７ｃｍ（推定全長　３８．０ｃｍ）

刃部	長さ	２６．８ｃｍ	茎部	長さ	９．５ｃｍ
	幅			幅	２．０ｃｍ
	関部	３．０ｃｍ			
	鋒より4cmの部分	２．０ｃｍ			
	厚さ			厚さ	０．３ｃｍ
	関部	０．６ｃｍ			
	鋒より4cmの部分	０．４ｃｍ			

三輪玉（第８図１）

鉄剣１の茎尻近くから出土した金銅製品は，その位置や形態などから推して三輪玉と考えられる。三輪玉の発見例のほとんどは刀に伴うが，本例の場合，剣に伴っているという点においてきわめて珍しいといえよう。



第８図　三輪玉・有孔円板・ガラス玉実測図

この金銅製三輪玉は全体の約２／３を検出することができたが，保存状態はきわめて脆弱で，取り上げることが困難な状態であった。しかし，発見当初の状況および他の出土例などから，そのおおよその規模･形態を復元することは可能でその概略を示せば，長さ３．１ｃｍ，最大幅２．５ｃｍ，くびれた部分の幅１．０ｃｍ，高さ１．５ｃｍほどの大きさである。造りはきわめて薄い銅地に鍍金を施した中空のもので，鍍金は全体的に良く残っている。

有孔円板（第８図２）

剣１の茎部に近接して出土し牛田早稲田遺跡近景牛田早稲田遺跡近景孔円板は、滑石製の単孔のもので、長径2.0cm、短径1.8cmの不整円形をしている。中新をややはずれて径1.5mmの孔を穿ち、厚さは3.5mmを測る。両面には製作時のものと考えられる擦痕が認められる。

ガラス玉

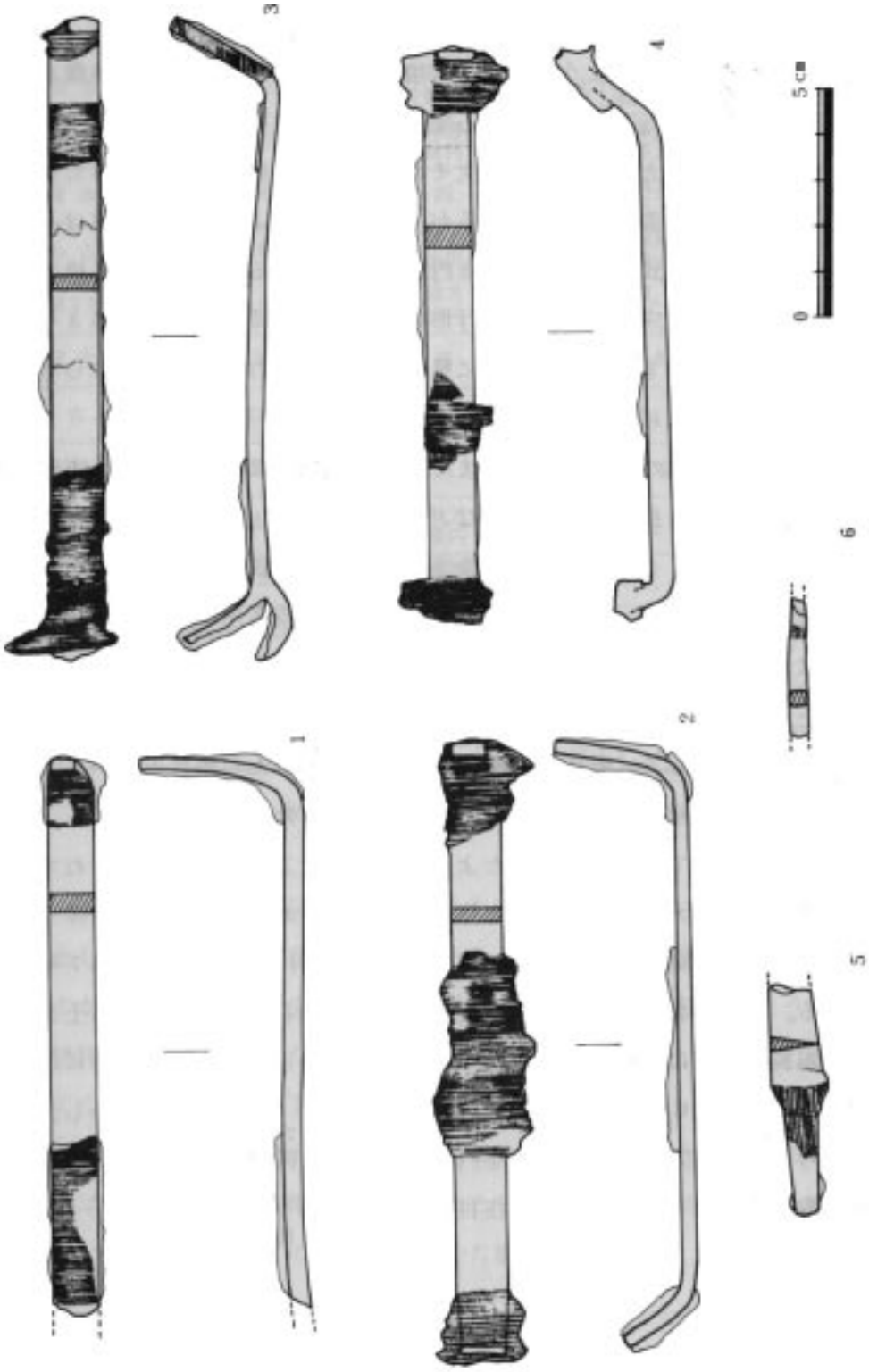
石室内の東南隅よりガラス玉11個が集中して出土した。これらのガラス玉はその形態から，扁平な感じのもの（第８図３～５），丸味をもったもの（第８図６～９），たて長な感じのもの（第８図１０～１３）の三種に分類ができる。色調はいずれも紺色でガラス玉９と１０は若干の風化が認められる。なお，ガラス玉の大きさは付表２のとおりである。

番号	長さ	外径	孔径	備考
3	4.2	7.8	1.5	透明
4	4.8	6.7	2.0	
5	5.0	6.5	1.6	
6	6.0	8.0	1.6	
7	5.7	7.0	1.5	
8	5.0	7.0	1.3	
9	5.5	7.7	1.6	
10	7.2	6.2	0.8	
11	5.7	6.0	1.6	透明
12	6.2	7.0	1.5	
13	6.2	6.9	2.1	

付表２．第１号墳出土ガラス玉計測表
（単位＝ｍｍ）

鉄製カスガイ（第９図１～６）

第１号石室内からは鉄製カスガイが５本分発見された。その内３本は旧形を保っており，１本は刃部の一方を欠し，他の１本は刃部のみの残片である。これらのカスガイにはいずれも内側表面に木質が残っていて，組合せ式の木棺の各部を固定したことがわかる。なお，これらのカスガイの出土位置からみて，カスガイの使用数量は６本であろうと推定される。



第９図　鉄器実測図

４．小結

これまで述べてきたように，第１号墳はいくつかの点において特徴をもっている。これらを列記してみると，①石室の構造，②蛇行剣身，③三輪玉，④有孔円板，⑤ガラス玉などであるが，順次それらについて検討を加えてみたい。

まず，石室の構造についてであるが，先に述べたように，本石室はその構造において竪穴系横口石室というべきない様のものである。この竪穴系横口式石室は，竪穴式石室から横穴式石室への移行形態とされ，福岡市老司古墳第３号石室をその初現とし[注1]，これまで北九州地方に集中して発見されている[注2]。これらの古墳は時期的には５世紀代に比定されているものが多い。

次に蛇行剣身については，これまで石川県狐塚（狐山）古墳，兵庫県亀山古墳，京都府南原古墳，長野県フネ古墳などの例から知られているが，発見例はきわめて少ないようである[注3]。この内，４世紀後半に比定される狐塚古墳の例は二曲の剣身で，本例に酷似している[注4]。曲身である正倉院の手鉾は伎楽用の道具であって実用武器ではないとの指摘があって[注5],本出土例についても実用性の有無を確かめる必要があると思われる。いずれにしても，この蛇行剣身または曲身剣と称される遺物がその形態から推して，呪術的な機能を付与されていた可能性が強い。あるいは，被葬者の生前の権威を象徴するものであったかも知れない。

三輪玉については，既に述べたように多くは大刀に伴って発見されている。そしてこのような大刀を玉纏大刀と称しているが,本例の場合は剣に伴う点において特徴がある。この場合においては剣に近接して９個の石英製三輪玉が出土している[注6]。

金銅製三輪玉は，横穴式石室内からの発見がほとんどで，時期的には５世紀後半ないし６世紀中葉にかけての所産とされている（付表３）[注7]。しかし，福岡県稲童２１号古墳は竪穴系横口式石室を内部主体とする円墳であるが，石室内から金銅製三輪玉を検出していることは注目すべきであろう[注8]。

番号	名　称	所在地	個数	墳形	主体部	伴出遺物
1	御三社古墳	群馬県富岡市七日市	3	前方後円	横穴式石室	菅玉、埴玉、臼玉、刀子片、須恵器
2	二子山古墳	群馬県前橋市総社町	4	前方後円	横穴式石室	金環、銀環、勾玉、鈴釧、頭椎大刀
3	将軍塚古墳	埼玉県行田市埼玉	5	円	横穴式石室	環頭大刀、馬具、金製勾玉、同平玉、銀製丸玉ほか多数
4	稲荷山古墳	滋賀県高島郡高島町	6	前方後円	横穴式石室	金銅冠、耳飾、沓、馬具、環頭大刀、須恵器ほか
5	坊主山第１号墳	京都府宇治市広野町	13	前方後円	木棺直葬	金環、銅釧、銅鈴、直刀、馬具、玉類、須恵器ほか多数
6	海北塚古墳	大阪府茨木市福井	14	円	木棺直葬	鏡、勾玉、山梔玉ほか
7	芝山古墳	大阪府枚岡市石切町	10	前方後円	横穴式石室	馬具、刀、剣、須恵器ほか
8	藤の森古墳	大阪府藤井寺市野中	?	円	横穴式石室	玉、短甲、鉄鏃
9	上ノ山古墳	山口県下関市綾羅木	5	前方後円	?	勾玉、六鈴鏡、刀、剣ほか
10	島田塚古墳	佐賀県唐津市鏡	5	前方後円	横穴式石室	勾玉、銅鏡、鉄刀、六獣鏡
11	龍王崎第４号墳	佐賀県杵島郡有明町	4	円	横穴式石室	鏡、金銅鈴、金銅製釧、挂甲、刀、須恵器ほか
12	稲童第２１号墳	福岡県行橋市稲童	2	円	竪穴系横口式石室	短甲、刀、検出中、鍬崎、馬具、三環鈴ほか
13	空長第１号墳	広島県広島市祇園町	1	円	竪穴系横口式石室	剣、有孔円板、鉄製ガスガイ、ガラス玉ほか

付表３　金銅製三輪玉出土古墳地名表

三輪玉は一般には５個あるいは７個を１組として大刀に取り付けられた例が初現的であるとし，以後次第に数がふえるといわれる[注10]。この点空長第1号墳からは金銅製のものがわずかに１個と少ないが，これはたとえば木製三輪玉のような遺存しにくい材料のものを使用した結果かも知れない。

有孔円板については，広島県下の古墳出土例はきわめて少なく，付表４に示すとおりである。この内，地蔵堂山第1号墳の例は大量１５個が一括出土しており，その出土状況は垂飾のごとき様相を呈していたということで注目されるが[注11]，空長第１号墳においては，剣のそばに静置された感じであった。

番号	名称	所在地	有孔円板 種類・個数	墳形	内部主体	伴出遺物
1	三玉大塚古墳	双三郡吉舎町三玉	双　孔 1	帆立貝	竪穴式石室	鏡、筒形銅器、刀、槍、胃、短甲、菅玉、小玉ほか
2	国成古墳	深安郡神辺町中条	双　孔 9	円	粘土郭	鏡、錘、鎌、刀子、勾玉、菅玉、小玉
3	川西第３号古墳	三好三若町川西	双　孔 3	円	箱式石棺	
4	地蔵堂山第１号墳	広島市高陽町金平	双　孔 １５	方	土壙	素環頭大刀、刀、鉾、斧、鎌、鍬先ほか
5	空長第１号墳	広島市祇園町西山本	単　孔 1	円	竪穴系横口式石室	剣、三輪玉、ガラス玉、刀子、カスガイほか

付表４　広島県有孔円板出土古墳地名表[注１２]

ところで，有孔円板を有する古墳は時期が５世紀代および６世紀前半に限られているようである。このうち，竪穴系横口式石室を内部主体とする福岡市飛山第１号墳からは，単孔の有孔円板４個が出土しているが，この場合は５世紀後半に比定されている[注１３]。

最後にガラス玉についてであるが，これらはその出土位置からみて，首飾りと考えることは困難であろう。

本主体部の被葬者の頭位は，三輪玉を飾りつけた剣１および有孔円板のあたり，つまり西側と考えられるが，その場合，ガラス玉は被葬者の右足首に装着された足玉の可能性もあるが速断はできない。

さて，以上のような特徴をあわせもった空長第１号墳の築造の時期はいつごろであろうか。大ざっぱに考えて遅くとも６世紀前葉，早ければ５世紀中葉頃とも考えられるが，５世紀後半のころとするのが妥当であろう。

注１　九州大学文学部考古学研究室『老司古墳』（１９６９）。
注２　福岡県教育委員会編『片山古墳群』
　　（『福岡県文化財調査報告』第４６集，１９７０）。
　　福岡市教育委員会編『和白遺跡群』
　　（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第１８集，１９７１）。
　　瀬高町教育委員会編「名木野古墳群」
　　（『瀬高町文化財調査報告書』第１集，１９７７）。
　　福岡市教育委員会編「席田遺跡群」
　　（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第４４集，１９７７）。
注３　大和久震平「桑５７号墳の発掘調査」（『月刊文化財』第９８号，１９７１）。
注４　大塚初重「刀剣と槍矛」（『世界考古学大系』３，１９７５）。
　　大和久震平「前掲書」
注５　大和久震平「前掲書」

注６　宗像神社復興期成会『沖の島』（１９５８）。
注７　堤圭三郎「宇治坊主山古墳出土の三輪玉について」(『史想』第１４号，１９６８)。
注８　小田富士雄「古墳文化の地域的特色―九州」
　　(『日本の考古学』Ⅳ，１９６６)。
注９　三輪玉の集成については，堤圭三郎「前掲書」に詳しい。
注10　堤圭三郎「前掲書」
注11　広島県教育委員会編「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」，
　　（１９７７）。
注12　地名表の作成にあたっては，広島大学潮見浩教授の教示を得た。
注13　福岡市教育委員会編「前掲書」（１９７１）。

第４章　第２号墳

１．古墳の構造

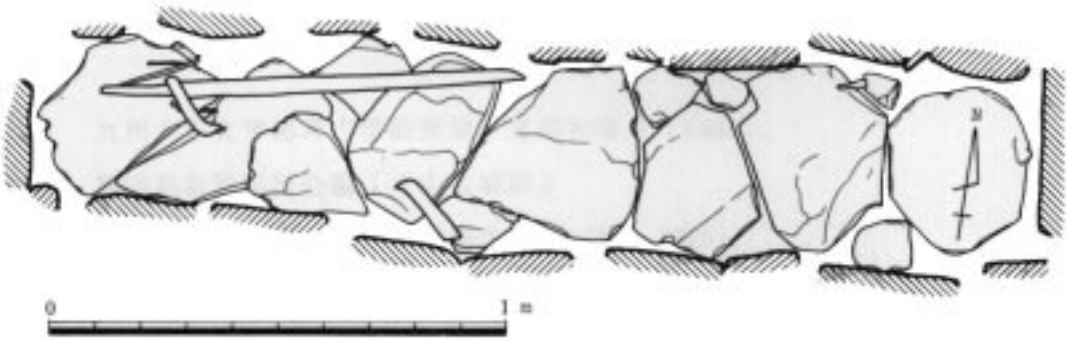
第2号墳は第１号墳の北約２３ｍのところに位置する。墳形は円墳で，直径m，高さ約１ｍほどの規模を有し，主体部は箱式石棺である。封土は，第１号墳と同様にかなり流出していた。地形的な関係によって西方斜面においては不明瞭であるが，幅１３０ｃｍ，深さ２０ｃｍほどの周濠がめぐっている。

２．主体部の構造（第１１図）

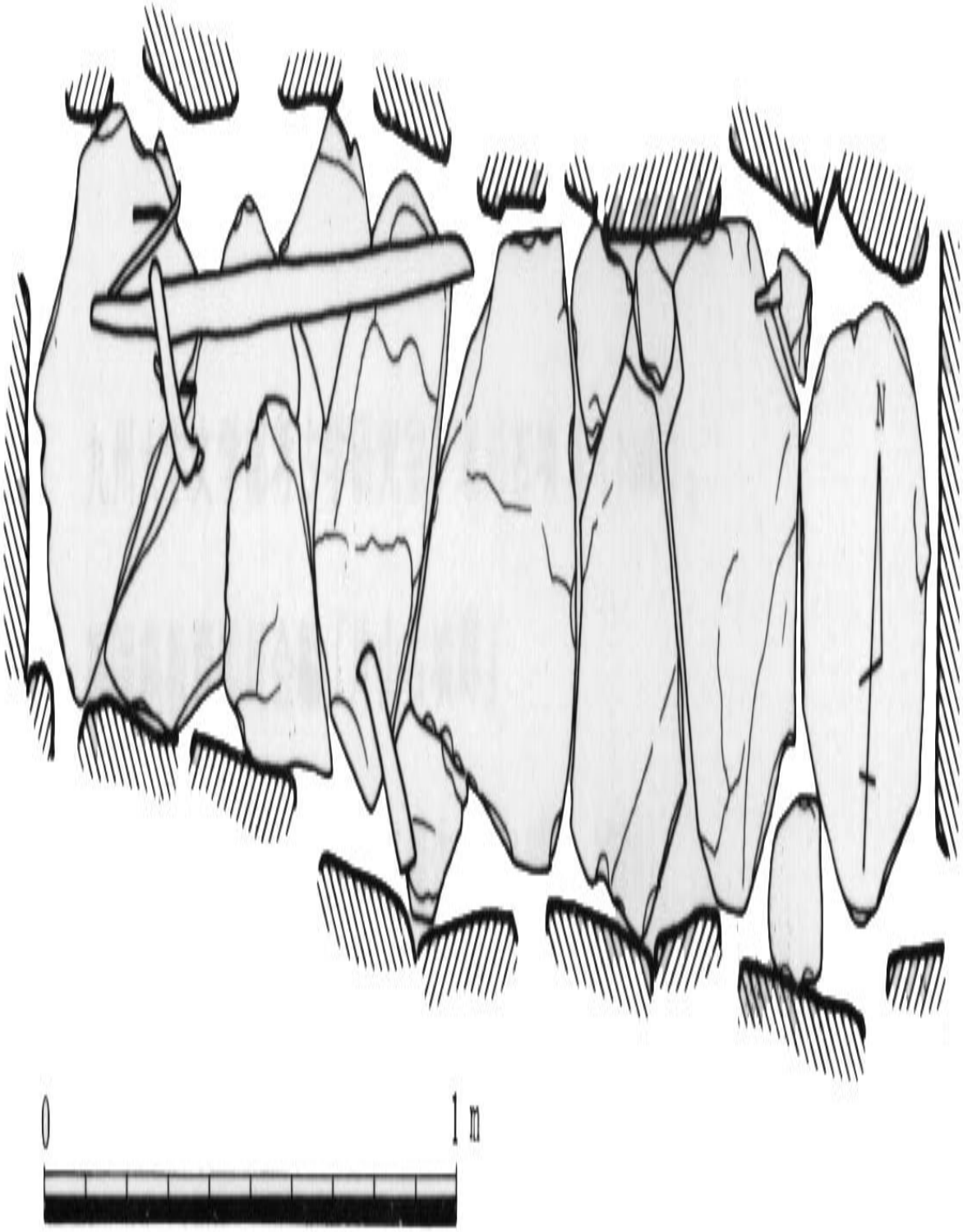
主体部は，墳丘の中央やや南西寄りに位置し，主軸をＮ８４Ｅにとる内法の全長２２０ｃｍ，幅は東側で４６ｃｍ，西側で３５ｃｍ，高さ４８ｃｍの箱式石棺である。
天井石は７枚前後で構成されたものであろうが，西側の２枚が原位置を保つのみで，２枚が棺内に転落，他は抜き取られていた。
この箱式石棺は，２６５ｃｍ×９０ｃｍの長方形の土壙内に埋置され，四壁の根石を縦方向の広口積みとし，その上部を割石の横口積みによって高さの調節をしている。根石の掘り方は根石の形状によって異なる。また床面には割石を敷きつめる。

３．遺物（第１０図）

棺内から出土した遺物には，直刀，鉄鎌２，鉈，刀子３，鉄鏃があり，全て鉄器である。その出土状態は刀子残片を除くほかはいずれも原位置を保っており，特に棺内西側に集中して検出された。
以下，それぞれの遺物について述べよう。



第１０図　第２号墳遺物分布図



第１１図　第２号墳石棺実測図

直刀（第１２図）

この直刀は全長９４．０ｃｍの完成品で，鋒を東に向け，北壁に沿って出土した。刀全体にわずかではあるが木質が銹着し，特に茎部においては直径２．０ｍｍの紐を繁巻きに柄巻きした痕跡が認められる。茎部にはまた，基部に抉りが見られ，茎尻は斜めに切り落とされている。目釘孔は，直径３．０ｍｍのものが２ヶ所穿たれている。

なお各部の計測値は次のとおりである。

全長　９４．０ｃｍ

刃部		茎部	
長さ	７８．２ｃｍ	長さ	１５．８ｃｍ
幅		幅	
関部	３．９ｃｍ	抉入部	２．２ｃｍ
中央	３．４ｃｍ	中央	２．２ｃｍ
鋒より８ｃｍの部分	２．９ｃｍ	茎尻	２．０ｃｍ
背の厚さ		背の厚さ	０．８ｃｍ
関部	０．９ｃｍ		
中央	０．９ｃｍ		
鋒より８ｃｍの部分	０．７ｃｍ		

第１２図　直刀実測図

鉈（第１３図）

この鉈は棺内の西寄り，北壁に沿った状態で出土した。鋒は東向きである。関部で折損するほかはほとんど旧形を保ち，鋒から４．１ｃｍのところより木柄が始まる。茎部にはその両面に木質が良く残り，木柄の装着は差し込みによるものであることがわかる。また茎尻のあたりには，幅４ｍｍほどの皮紐を巻いているのが観察される。断面三角形の刃部は，約３０度の角度で上ぞっている。

各部の計測値は次のとおりである。

全長　１９．３ｃｍ（木柄部分を含む）

刃部		茎部	
長さ	４．１ｃｍ	長さ	１４ｃｍ前後
幅	１．１ｃｍ	幅	１．０ｃｍ
厚さ	０．３ｃｍ	厚さ	０．４ｃｍ

鎌（第１３図２・３）

２本の鎌はいずれも棺内から発見されたもので，１は鉈の近くから，他は南壁に接して出土した。

前者は完形品で，全長１５．５ｃｍ，基部の幅２．９ｃｍを測り，先端が内弯し基部を直角に折りまげる。木柄のつく部分は，刃部よりわずかに幅広となっている。

後者は３個に折損していたが，接着可能である。全長１６．９ｃｍ，基部の幅３．３ｃｍを測り，前者に比べやや大きく，基部の折り返しも逆方向である。刃部先端はわずかに内弯し，基部の幅は刃部より狭くなる傾向があり，全体的に古調を示している。

なお，出土状態からみて，両者共に刃部先端を上として側壁に添え置いたものと考えられる。

小形刀子（第１３図４）

鉈の下部から出土したこの刀子は，全長が４．３ｃｍ，刃部の長さ２．２ｃｍ，最大幅０．９ｃｍ，背の厚さ０．２ｃｍの完形品である。刃部・茎部共に刃がついているが，茎部には木質が付着していることから両者の区別は判別できる。

この刀子の使途は不明であるが形態からみて，鉈と同様に比較的長い柄をつけたけずり小刀の一種であろうか。

刀子（第１３図５）

鎌１の下から出土したこの刀子は，全長が１１．４ｃｍ，刃部の長さ７．９ｃｍ，背の厚さ０．４ｃｍの完形品である。

刃部の最大幅は関にあって１．９ｃｍ，鋒に近くなるにつれわずかに反りをもちながら幅狭くなっている。

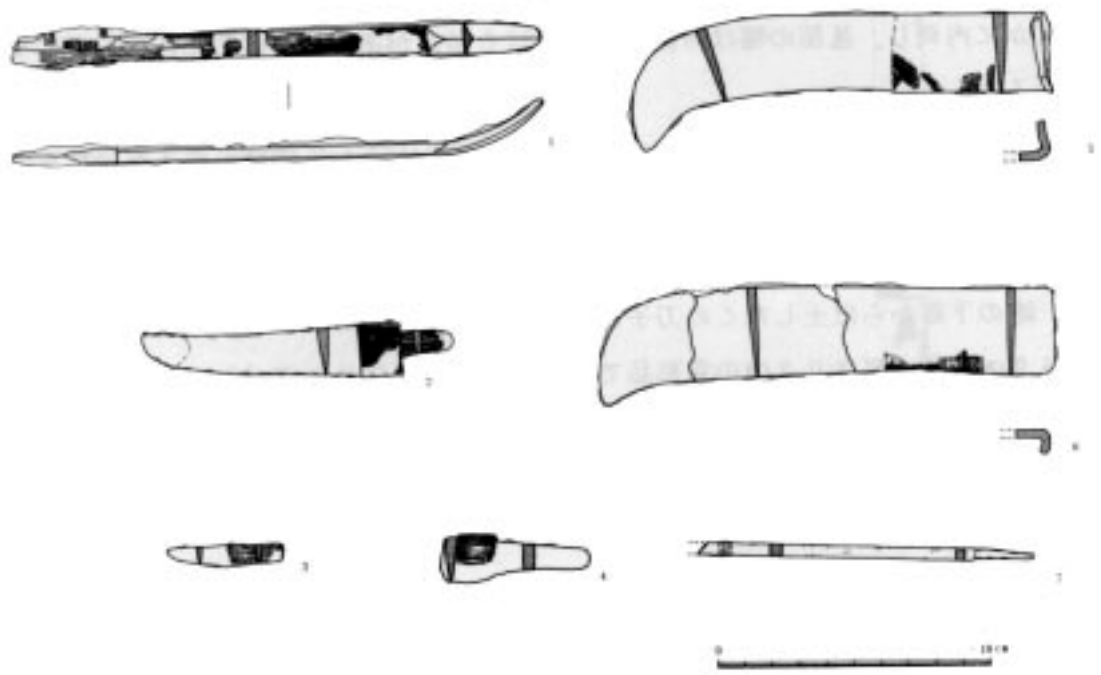
茎部は矮小で長さ３．５ｃｍ，幅１．０ｃｍを測るにすぎない。茎部の基部には木柄の上から幅１．５ｃｍの皮を柄巻きにし，その上を黒漆塗りとしている。

刀子残片（第１３図６）

棺内のやや東寄り，北壁に沿って出土したこの刀子残片は，茎部から関にかけてのもので，現存長５．６ｃｍを測る。全体的には先出の刀子と同様の形態のものであろうと思われる。

鉄鏃残片（第１３図７）

鉈と北壁の間より出土した鉄器は,その形状よりみて鉄鏃の茎部であろうと思われる。現存長１２．０ｃｍ，一辺０．４ｃｍの角棒状をしており，茎尻に近くなるほど細かくなっている。刃部の形態は不明である。



第１３図　鉈・鎌・刀子・鉄鏃実測図

４．小結

この第２号墳の主体部は箱式石棺ではあるが,割石を１～３段横口積みすることによって側壁の高さを補足調整しており，竪穴式石室の構築法のなごりがかなり残っている。

第２号墳の被葬者の頭位は東側とも思われるが，直刀との位置関係において，西側とするのが妥当と考えられる。

また，棺内からの出土遺物も棺内東側は撹乱を受けている可能性があるものの，鉄製品に限られている点は古式古墳に近い様相を呈するもので，空長第２号墳の築造時期は５世紀末ないし６世紀初頭の頃ととらえたい。

第５章　第３号墳

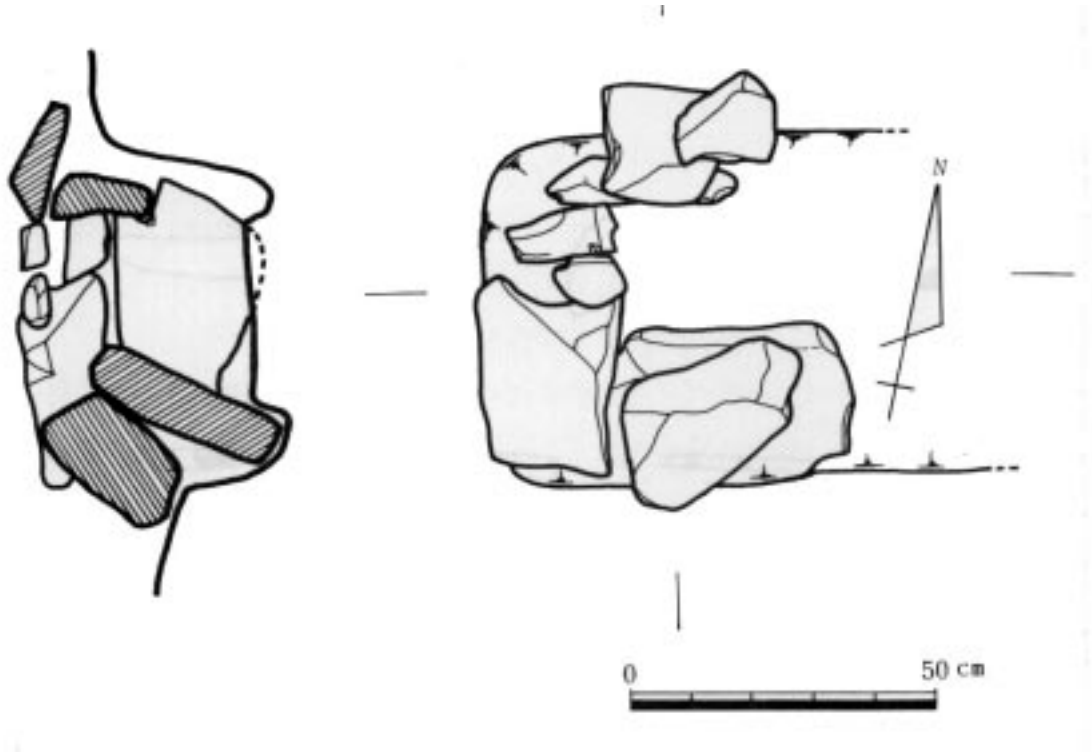
１．古墳の構造

第３号墳は第２号墳の北側に接する円墳で，墳丘の規模は直径６．５ｍ，高さ０．８ｍ，空長古墳群中ではもっとも小さい。

古墳の周囲には幅１２０ｃｍ，深さ２０ｃｍほどの周濠がめぐっており，内部主体は箱式石棺である。

２．主体部の構造（第１４図）

すでに述べたように箱式石棺を内部主体としている。しかし，棺を構成する大半の石材が抜きとられ，西側奥壁と考えられる部分とそれに接する南壁の一部が残されているのみであった。したがって，石棺の規模，構造等については不明な点が多い。



第１４図　第３号墳石棺実測図

４．小結

以上述べたように，第３号墳は特に主体部が損壊しているため不明な点が多く，ために，築造の時期を知る手がかりはほとんどない。

しかし，わずかに残された西壁と南壁の一部の石積みの手法ｈ，第２号墳の場合と全く同じである。また，第３号墳の周濠が，第２号墳の墳丘に切り入っている。速断は慎まなければならないが，第３号墳の築造は石積みの手法および占地の条件などから第２号墳とほぼ同時期，それも若干後出の頃と考えて良いのではあるまいか。

第６章　第４号墳

１．古墳の構造

第４号墳は第１号墳と第２号墳の中間東寄り平坦地に位置し，第１号墳とは南西部分で，第２号墳とは北西部分で接している。

墳形は円墳で直径８ｍを測るが，高さは封土の東方急斜面への流出がひどいために判然としない。主体部は第１号墳に酷似し，古墳の周囲には幅１３０ｃｍ・深さ２５ｃｍほどの周濠がめぐっている。

２．主体部の構造（第１５図）

主体部は墳丘のほぼ中央にあって，主軸方向をＮ５６Ｅにとり，内法の全長２７５ｃｍ，最大幅５８ｃｍ，最小幅４６ｃｍ，高さ６９ｃｍほどの規模を有する竪穴式石室構造のものである。

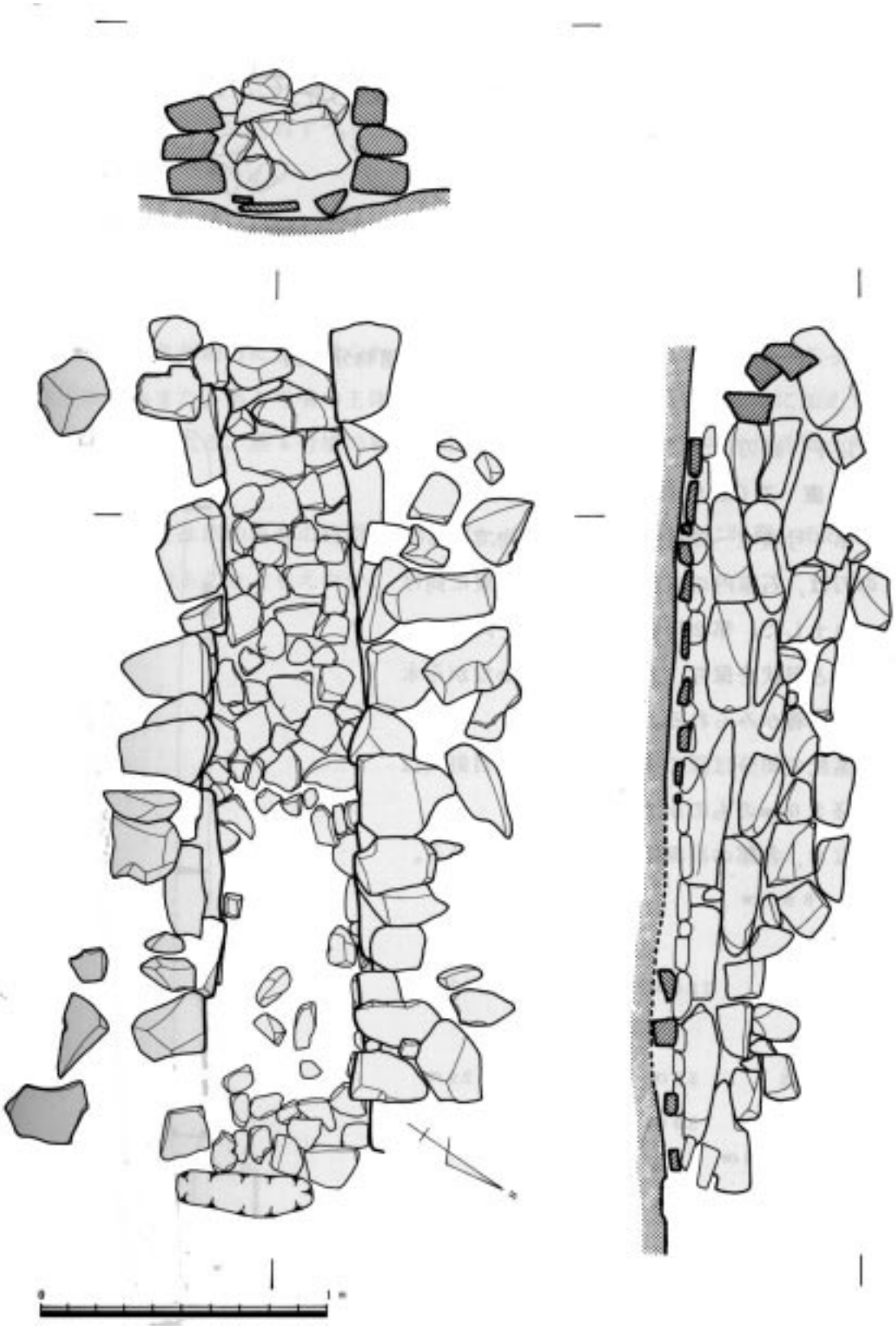
天井石は一部の側壁最上段の割石とともに大半が抜きとられ，２枚が石室内に落ちこんでいた。また，石室の東寄りの部分は撹乱がひどく，東側奥壁および床石の一部は失われている。

南北両壁は第１号墳の場合と同様の板石による小口積みまたは横口積みであるが，第１号墳と異なるのは使用されている石材に扁平な河原石の混用がかなり目立つ点であろう。このことは床石についても同じで，第４号墳の場合，床石として５～１５ｃｍ大の平らな河原石が半数近く使用されている。床面はわずかながらもＵ字形に構成され，棺が割竹形の木棺であったことがわかる。

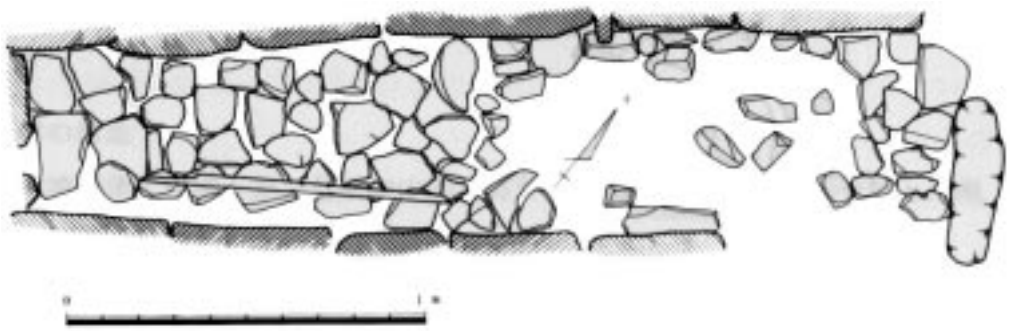
なお,側壁の石積みは旧状を保っていると考えられる部分において５段まで認められ,第１号墳に見られたような控え積みはほとんどない。

３．遺物（第１６図）

本主体部から検出された遺物は，石室内の西寄りから南側壁に沿って出土した直刀とその鋒部付近から出土した刀子残片のみであった。直刀は出土した位置および出土状態からみて原位置を保っているものと考えられる。刀子残片は刃部の一部で旧状がどのようなものであったかは不明である。



第１５図　第４号墳石室実測図



第１６図　第４号墳遺物分布図

以下，直刀について詳述しよう。

直刀（第１７図）

第４号墳唯一の石室内出土の遺物であるこの刀は，石室内の南西部分から鋒を東に向けて出土した。第２号墳出土の直刀と同様，ほとんど旧状を保ち，刀全体にわずかながら木質の銹着がみられる。

茎尻の部分は深く抉られており，目釘穴は直径３．０ｍｍのものが２ヶ所ある。

なお，各部の計測値は次のとおりである。

全長　８８．１ｃｍ

刃部		茎部	
長さ	７２．４ｃｍ	長さ	１５．７ｃｍ
幅		幅	
関部	３．８ｃｍ	関部	２．９ｃｍ
中央	３．３ｃｍ	中央	１．６ｃｍ
鋒より８ｃｍの部分	２．５ｃｍ		
厚さ		厚さ	
関部	０．８ｃｍ	中央	０．７ｃｍ
中央	０．７ｃｍ		
鋒より８ｃｍの部分	０．５ｃｍ		

第１７図　直刀実測図

４．小結

本主体部において注目すべきは西壁の構造であることはすでに第３章において述べたとおりである。

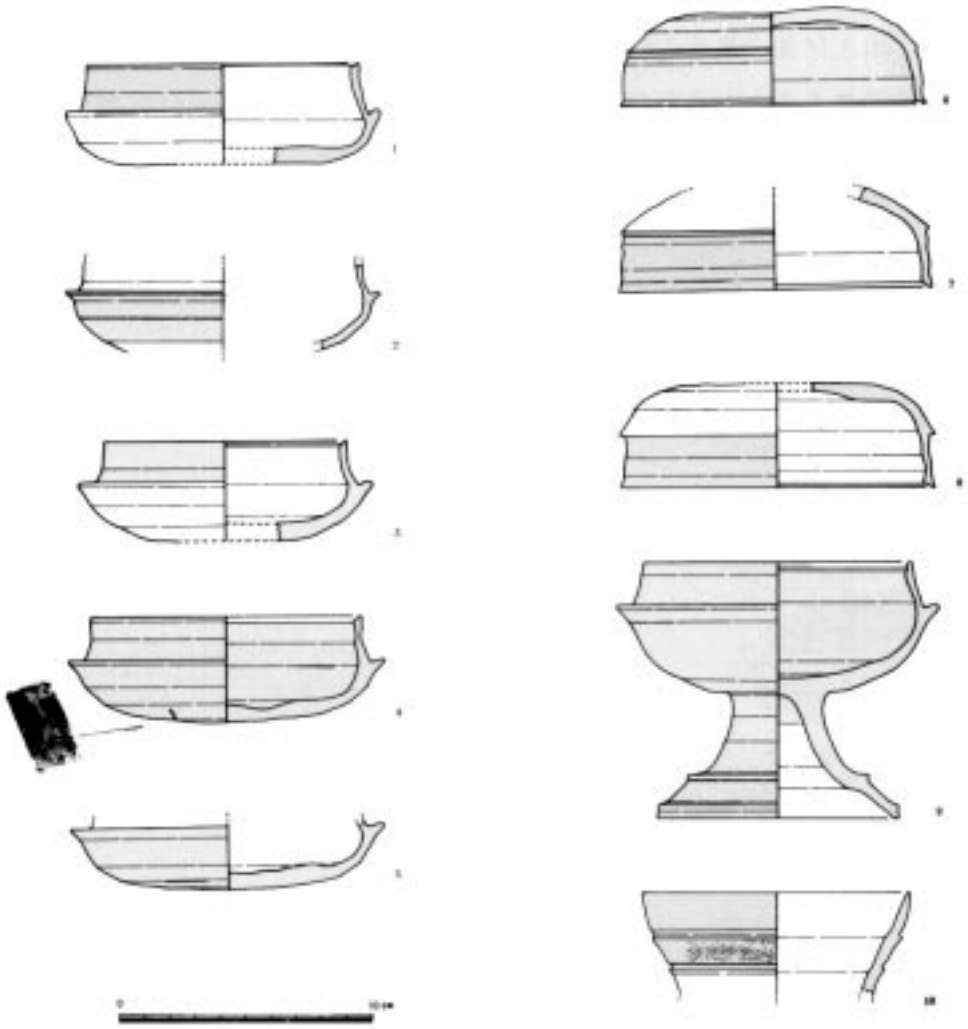
本主体部の西壁は，１０～２０ｃｍ大の角礫を土砂とともに無造作に積みあげた感じのもので，横穴式石室にみる閉塞施設の構造そのものである。また南北両壁は若干ではあるが西壁の後方に向って延びており，羨道を思わせる。以上のことは，北九州地方に多く見られる竪穴式横口式石室と共通するものであって，本主体部もまた，第１号墳の主体部とともに竪穴系横口式石室の範疇に加えて良いかと考えられる。第４号墳の被葬者の頭位は直刀の位置からすれば西側と考えられる。

なお，本主体部の築造の時期については，第１号墳とほぼ同じ時期，それもやや後出の頃のものととらえたい。

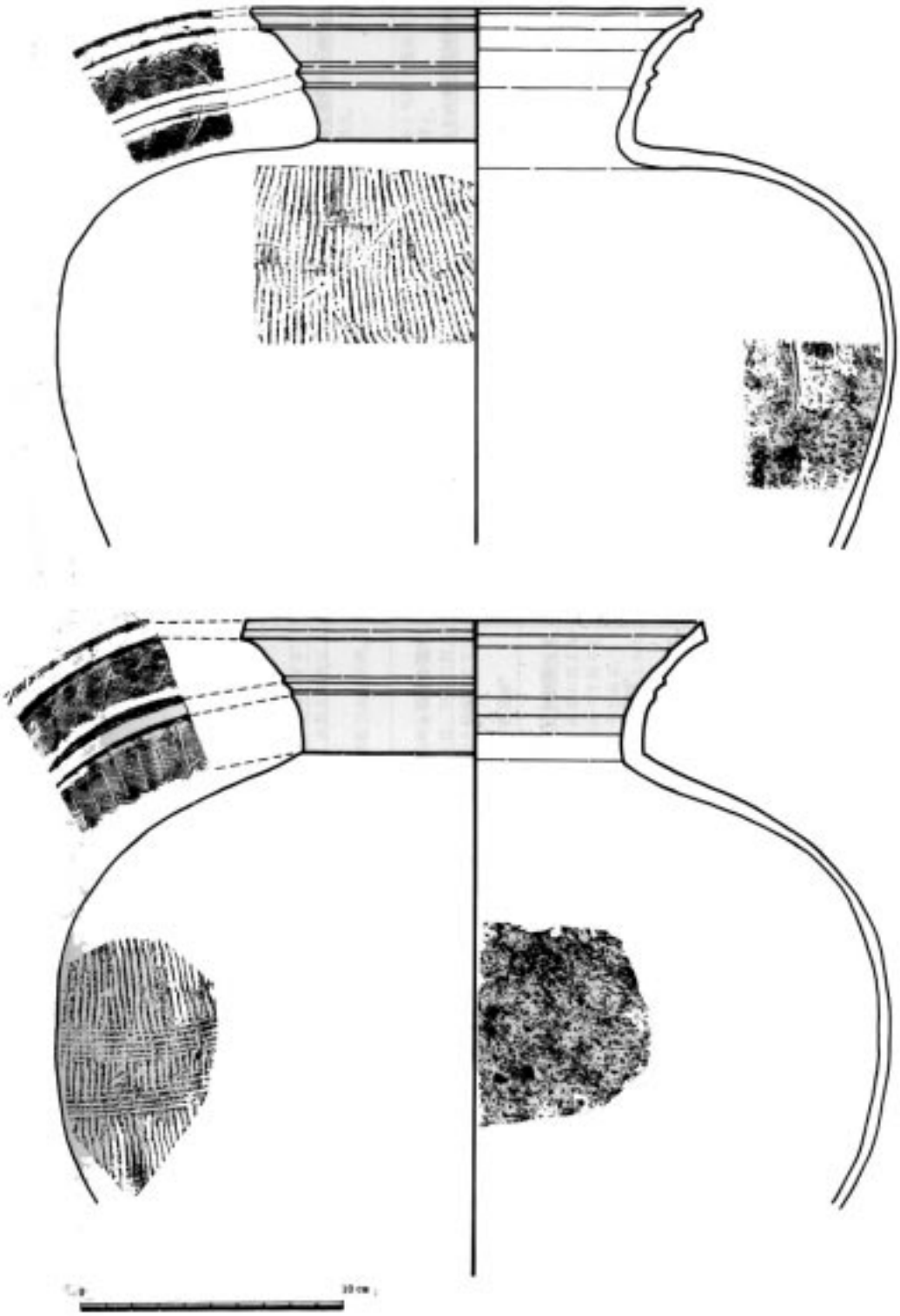
第７章　須恵器

これまで述べてきたように，空長古墳群においては主体部内からの土器類の出土は皆無であった。また，墳丘における埴輪や葺石などの外表施設も見出せなかったが，第１号墳の封土中より少量の土師器細片と第２・第３．第４号墳の封土中および周濠付近から若干量の須恵器の出土をみた。このうち，須恵器では坏身・坏蓋・有蓋高坏・直口壷・中型甕などの器形が含まれるが，そのいずれも焼成堅緻で丁寧な作りによる古式の様相を呈している。

本章においては，検出した須恵器のうち計測可能ないくつかをとりあげてその特徴をまとめてみたい。



第１８図　空長古墳群出土須恵器（中型甕）実測図



第１９図　空長古墳群出土須恵器（坏，高坏・直口壷）実測図

付表５　空長古墳群出土須恵器一覧表

土器番号	器形	口径	高さ	最大径	形態の特徴	手法の特徴	焼成	胎土	色調	備考
1	坏身	10.7 cm	4.0 cm	12.4 cm	たちあがりはわずかに内傾し、高さ2.0cmに達する。端部は段をもって内傾している。受部は丸味をおび、たちあがり基部に溝がみられる。体部・底部のほとんど全面に幅５mmほどの回転ヘラ削りを施し、底は平坦で全体的に扁平な感じが強い。	まきあげ、水引き調整による。水引きは器体の内外面全体に施している。ロクロ回転は左方向。	きわめて堅緻	きめこまかな石英砂粒を含み精選されている。	黒灰色。	第４号墳周濠南側から出土。
2	坏身	?	?	12.5	たちあがりは一度内傾して、肥厚しながら直上する傾向をもつ。 受部はみじかく外上方にのびるが、先端は丸味をもっている。 体部・底部には全面にわたって丁寧な回転ヘラ削りを施している。	まきあげ、水引き調整による。 ロクロ回転は右方向。	同上。	同上。	濃灰色。	第４号墳封土中から出土。
3	坏身	9.5	4.0	11.6	たちあがりはわずかに内傾し、高さは1.8cm、端部は内方へ傾斜する。 受部はわずかに丸味をおびる。 体部・底部の4/5を回転ヘラ削り、底は平らに仕上げている。	まきあげ、水引き調整による。 ロクロ回転は左方向。	堅緻。 体部器表に白斑が認められる。	きめこまかな石英砂粒と黒雲母を含む。	同上。	第４号墳周濠西側から出土。
4	坏身	10.7	4.2	12.5	たちあがりは一度内傾して直上し、高さは1.9cmを測る。端部は内傾し、明瞭な稜を有する。 受部は平坦でやや内傾気味である。 体部・底部の全面に回転ヘラ削りを施し、底は平らである。	同上。 体部器表にヘラ記号が認められる。	堅緻。 体部器表に白斑が認められる。	同上。	暗青灰色。	第２号墳丘裾西側から出土。
5	坏身	?	?	12.4	たちあがりは欠損するため形態は不明である。 受部は外上方へのび、先端は比較的鋭い。 体部・底部の4/5を回転ヘラ削り、底はわずかに丸味をおびるが、ほとんど平坦に近い。	同上。 内面のナデが顕著である。	堅緻。	きめこまかな石英砂粒を含む。	同上。 胎土によるものであろうが黒色の斑点を多く有する。	第３号墳封土中から出土。
6	坏蓋	12.1	3.9	11.5 (天井部)	天井部よりも体部の方が幅があり、体部は若干外傾する。口縁端部はわずかに内弯する。天井部には、その全体に狭い間隔で回転ヘラ削りを施し、平坦に仕上げている。	同上。	同上。	同上。	灰色。	第４号墳周濠西側から出土。
7	坏蓋	12.4	?	12.1 (天井部)	天井部と体部の比は１：１に近いものと思われる。体部はわずかに外傾する。口縁端部は内傾する。	同上。 内面のナデが顕著である。	きわめて堅緻。 天井部全体に暗緑色の自然釉がかかっている。	きめこまかな石英砂粒と黒雲母を含み精選されている。	暗青灰色。	第４号墳周濠南側から出土。 酷似する別個体の細片が第４号墳周濠東側からも出土している。
8	坏蓋	12.4	4.2	12.4 (天井部)	天井部と体部の比は１：１で体部は外傾気味である。 口縁部はわずかに内傾する。 天井部の4/5に丁寧な回転ヘラ削りを施し、平坦に仕上げている。 全体にシャープな感じを強く受ける。	同上。	同上。 体部器表に白斑が認められる。	同上。	青灰色。	第２号墳周濠南東側から出土。 高坏９の蓋となる可能性がある。 つまみの有無については不明である。
9	高坏	10.5 9.5（脚部）	10.3 5.2（坏部） 5.1（脚部）	12.7	坏部のたちあがりは内傾しており、1.8cmを測る。口唇部は丸く内側直下にヘラ描きによる１条の沈線を有する。 受部は平坦でやや内傾気味である。 坏部と脚部の比はほとんど１：１である。 脚部の裾には断面三角形の凸帯をめぐらし、円孔や透かしは見られない。	同上。 坏部内面のナデが顕著である。	堅緻。 脚部全体に暗緑色の自然釉がかかっている。	同上。	同上。 受部以下は黒灰色に近い。	同上。
10	直口壷	?	?	?	口頸部のみで体部を欠している。 外上方にのびる口頸部に断面三角形の凸帯を２条めぐらし、凸帯の間には櫛描きの波状文をめぐらしている。	まきあげ、水引き調整による。 ロクロの回転方向は不明。	きわめて堅緻。	同上。	茶褐色。	第２号墳墳丘西側裾から出土。
11 (1)	中型甕	?	?	31.8 (体部)	口頸部は朝顔形に肉を減じながら、外反し、端部はわずかに丸みをおびる。頸部中央には断面三角形の凸帯を２条めぐらす。口縁部直下に櫛描き波状文をめぐらしている。 体部の肩はよく張っている。 全体に肉薄な感じを受ける。	まきあげ。 器表は平行叩き目文を残し、内面は叩き目　完全に消去され、水引き調整されている。	同上。	きめこまかな石英砂粒を含み精選されている。	全体的には青灰色。 口頸部の一部は黒灰色。 体部下半は灰褐色を呈す。	第２号墳周濠南東側から出土。 全体の復元は可能である。
12 (2)	中型甕	?	?	31.7 (体部)	口頸部は朝顔形に肉を減じながら、外反し、端部はわずかに丸みをおびる。頸部中央には断面三角形の凸帯を２条めぐらす。口縁部直下に櫛描き波状文をめぐらしている。体部の肩はよく張っている。全体に肉薄な感じを受ける。	まきあげ。 器表は格子状に近い叩き目文が残るが、体部の肩より下部は横方向のヘラ削りを施しているようである。内面は同心円文がほとんど消されている。	同上。 器表の一部にに暗緑色の自然釉がかかっている。	黒雲母を含み精選されている。 石英砂粒の混入はわずかである。	灰色。	第２号墳墳丘東裾から出土。 全体の復元は可能である。

一覧表に示したごとく，本古墳群出土の須恵器はいずれも最古式といわれる須恵器の形態的特徴を具備しているようである。このことは本章では割愛した計測困難な須恵器片についても同様である。これら一連の須恵器は，田辺昭三氏等による陶邑古窯址群の型式分類のうちＴＫ２０８に似るが，その前段階とされるＴＫ２１６に共通する点も見受けられるようである。

注１　平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群１』（１９６６）。
注２　横浜市教育委員会鈴木重信氏より古式須恵器の図版資料の提供を受けたほか多くの教示を得た。

第８章　結語

広島県の西半部，すなわち古代安芸国に属する広島市とその周辺では箱式石棺を内部主体とする古墳がしばしば発見されている。空長古墳群も当初は，箱式石棺を内部主体とする円墳群と予想されていたものである。しかし，こうした予想に反して空長古墳群からは広島県下では初見の竪穴系横口式石室２基が発見された。この竪穴系横口式石室については撹乱を受けていて不完全な形で発見されたためになお検討すべき余地は残るが，北九州を中心として発見されている多くの例からみてほぼ竪穴系横口式石室と断定し得るものと考える。

第１号墳は竪穴系横口式石室という内部主体の構造もさることながら，その出土遺物の構成は特に注目してよいものであろう。このうち，蛇行剣身と長剣の柄部が反対方向に位置している点は理解に苦しむところであるが，あるいは追葬による結果とも考えられる。すなわち，第１次埋葬は頭位を東向きとして蛇行剣身を副葬し，第２次埋葬は頭位を西向きとして長剣，三輪玉，有孔円板等を副葬した可能性がある。この場合１１個のガラス玉は紐通しにした状態で第１次埋葬の際に頭部付近に静置されたと考えることもできよう。この追葬の可能性については，竪穴系横口式石室本来の機能と九州にみられる諸例を考え合わせれば十二分に有り得ることである。なお同じ竪穴系横口式石室を内部主体とする第４号墳については，かなり撹乱を受けているために，追葬の有無は不明である。

空長古墳群を構成する４基の円墳のうち第２号墳と第３号墳は箱式石棺を内部主体としている。これら箱式石棺は，その構造から簡略化された竪穴式石室と考えることもできようが，その規模（容積）や築造法からみて竪穴式石室の築造の技法を強く受けついだ箱式石棺と考える方がより妥当であろう。とはいえ，第２号墳の内部主体は箱式石棺としては長大といえるものであり，棺内からかなり豊富な鉄製品の出土をみたことは注目に価する。

空長古墳群の各古墳の築造順位と築造の時期については，内部主体からの出土遺物の内容・占地の条件等からみて，一応は，第１号墳（５世紀後半）→第４号墳（５世紀後葉）→第２号墳（５世紀末ないし６世紀初頭）→第３号墳（６世紀初頭？）ととらえたい。このことは，主体部外からの発見ではあるが須恵器の内容によってもほぼ認められるところである。つまり，空長古墳群は，山本地区の湾入部において５世紀中葉と比定される三王原古墳と浄円寺，部谷山，上組などの後期横穴式石室墳の間隙を埋めるものと考えることができよう。

以上，空長古墳群の概括をまとめてみたが本報告書の作成にあたっては，不十分な調査体制と時間的制約から意を尽くせないまま終わってしまった点が少なくない。調査の成果については今後なお検討し，機会を改めて報告することとしたい。

注１　竪穴系横口式石室については国学院大学乙益重隆教授より多くの教示を得た。
注２　福岡県教育委員会編「片山古墳群」
（『福岡県文化財調査報告書』第４６集，１９７０）。

1.　空長古墳群遠景（中央↓印）

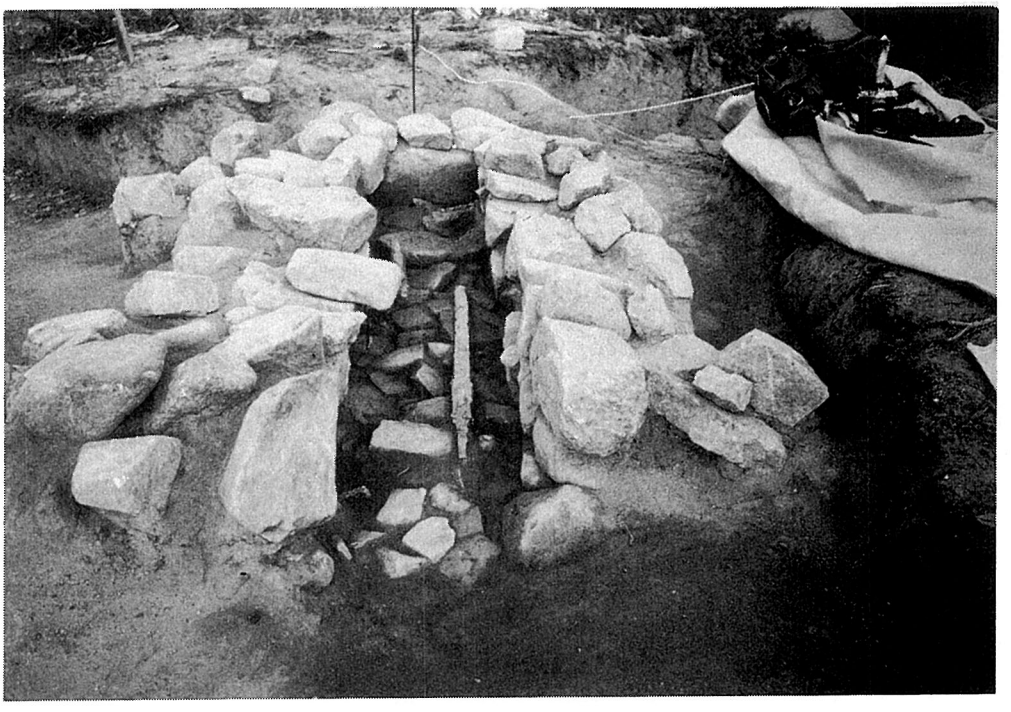
2.　空長古墳群近景

1.　空長古墳群全景（北より）

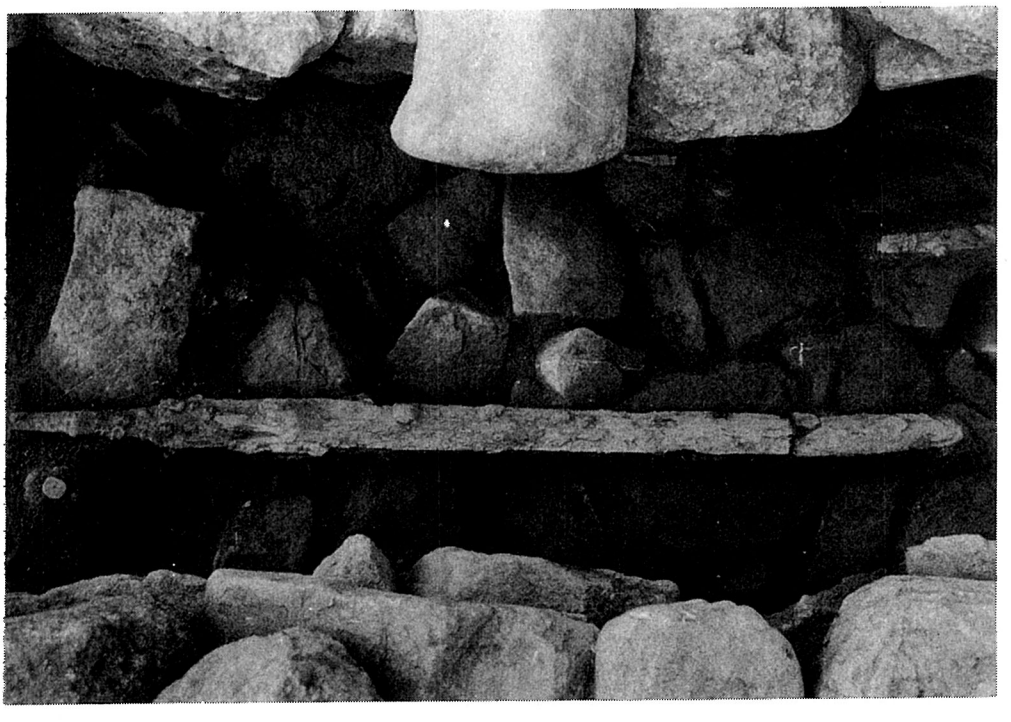
2.　空長第 1 号墳全景

1.　空長第 1 号墳全景

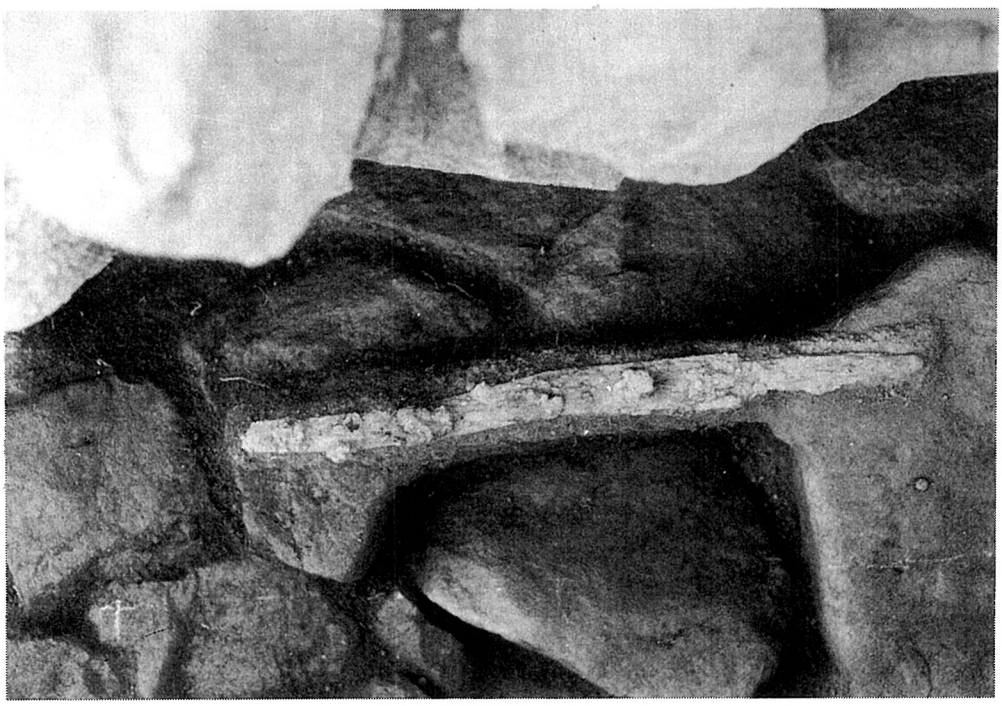
2.　空長第 1 号墳主体部全景（表土を除いたところ）



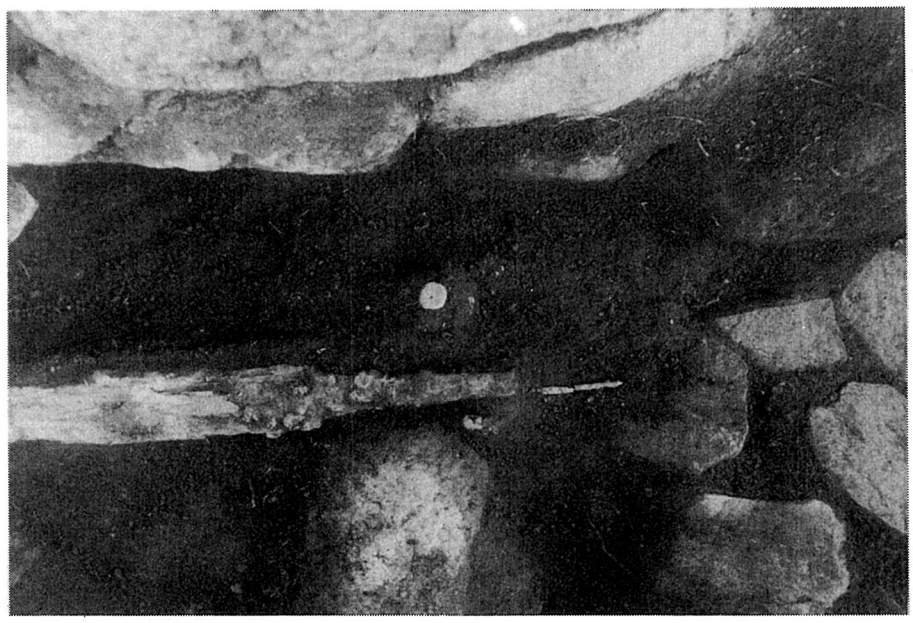
1.　空長第 1 号墳主体部全景（遺物出土状態）



2.　空長第 1 号墳主体部内鉄剣出土状態

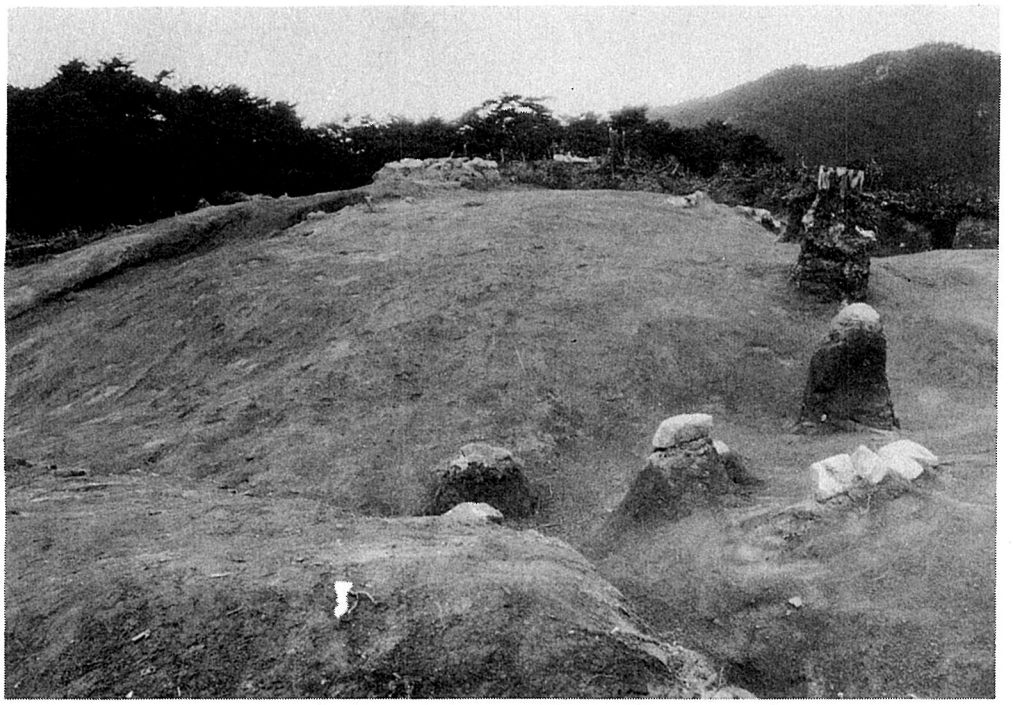


1.　空長第 1 号墳主体部内蛇行剣身出土状態



2.　空長第 1 号墳主体部内金銅製三輪玉，有孔円板出土状態

1.　空長第 1 号墳主体部の横口部

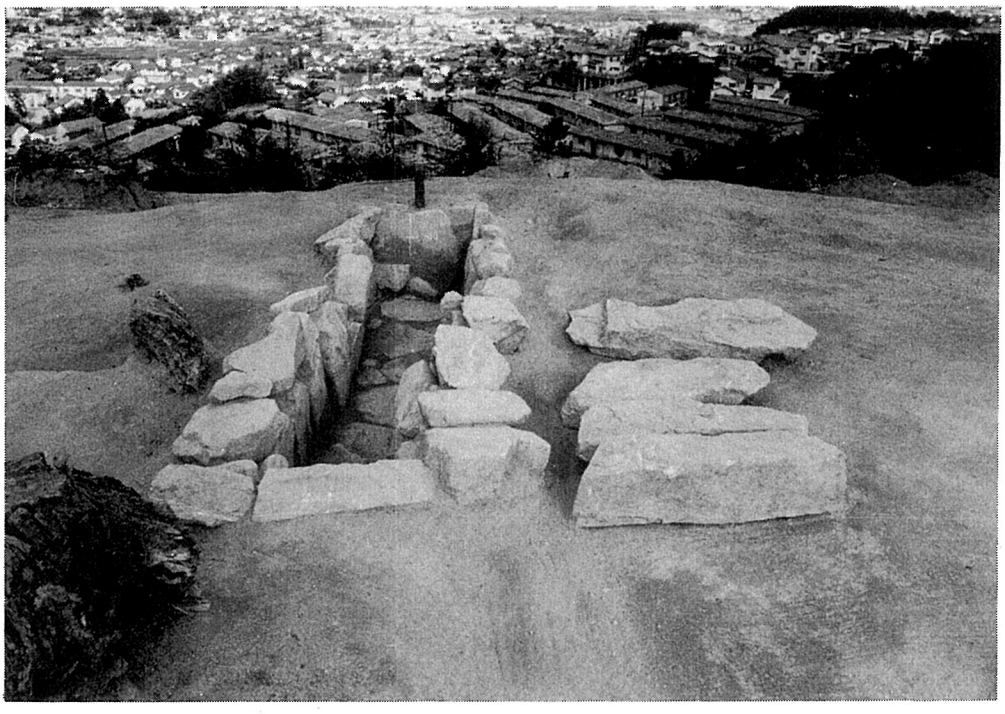


2.　空長第 1 号墳墳丘全景

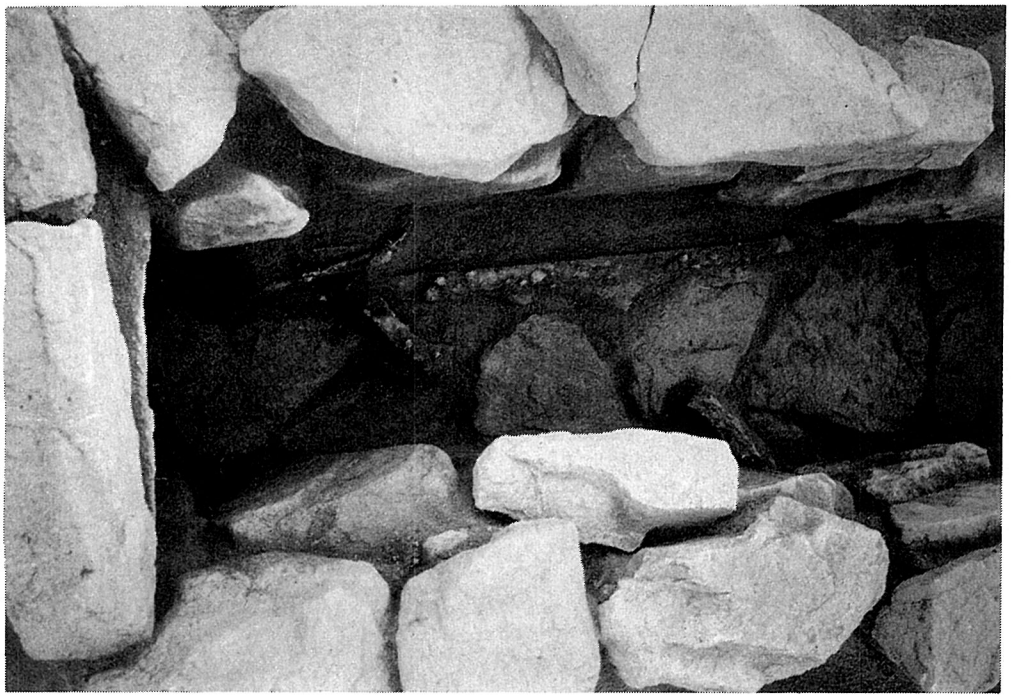
1.　空長第 2 号墳全景（調査前）

2.　空長第 2 号墳全景（調査後）

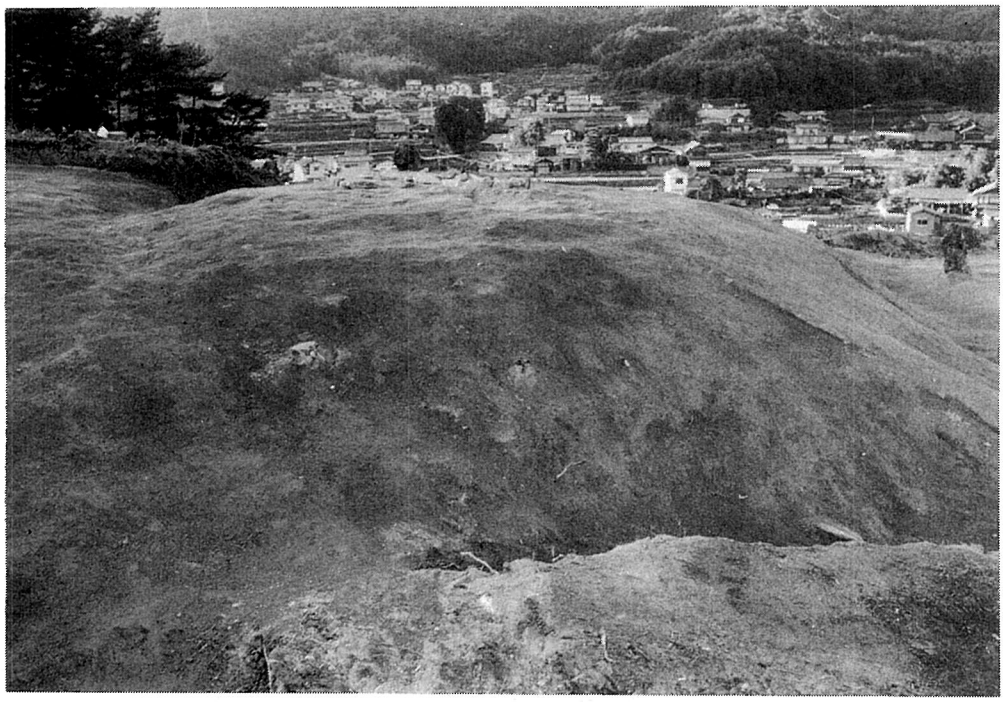
1.　空長第２号墳主体部全景（表土を除いたところ）



2.　空長第２号墳主体部（調査後）

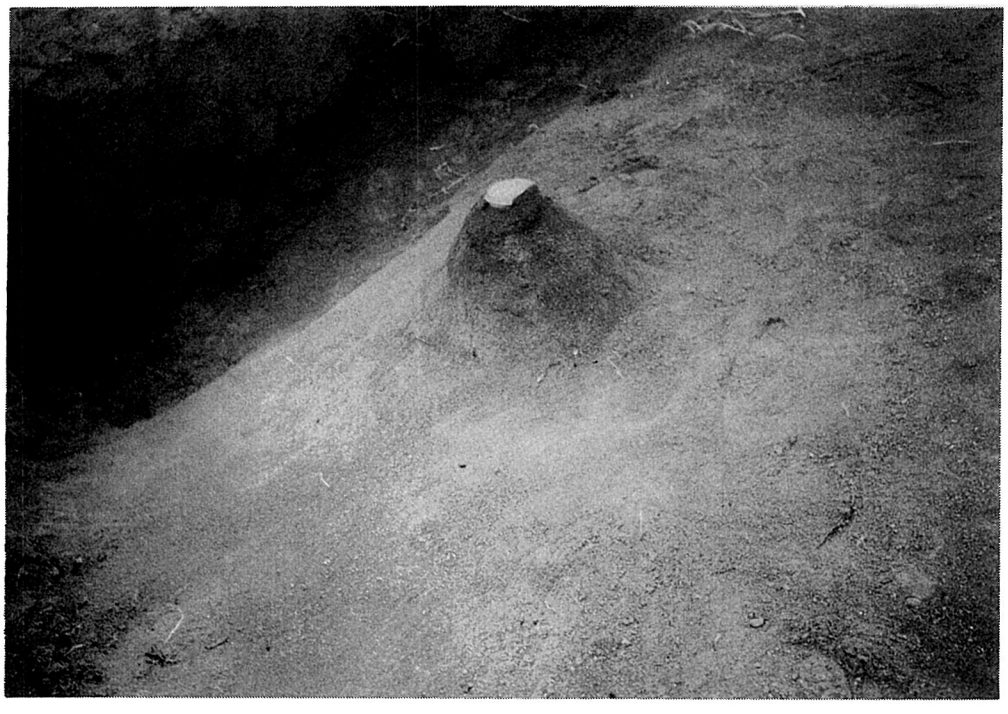


1.　空長第 2 号墳主体部内遺物出土状態



2.　空長第 2 号墳墳丘全景

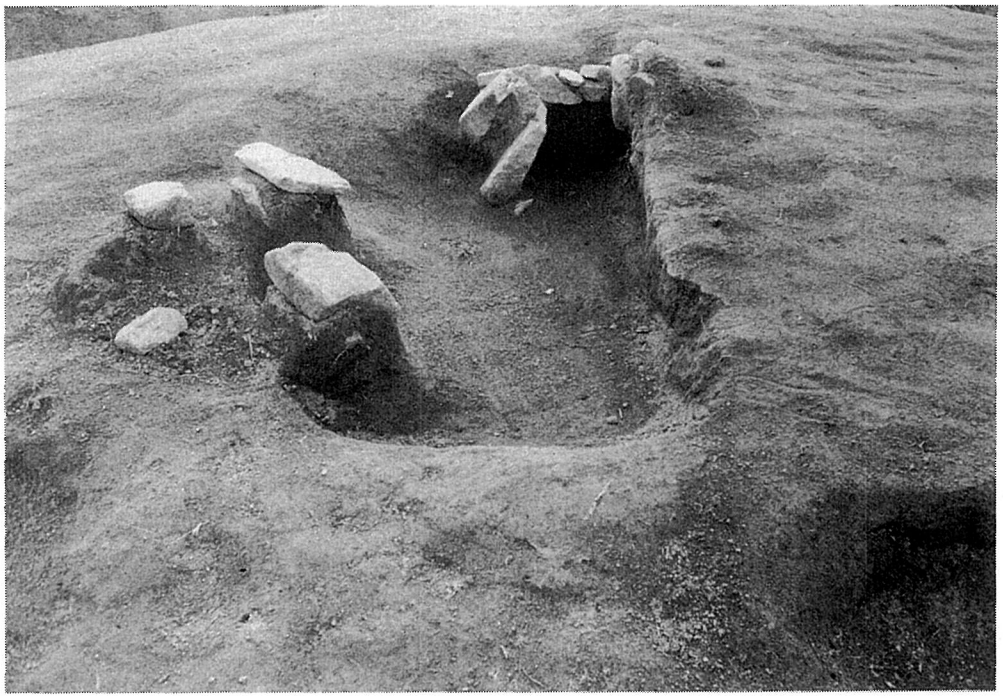
1.　空長第２号墳周濠内（南東部）須恵器出土状態



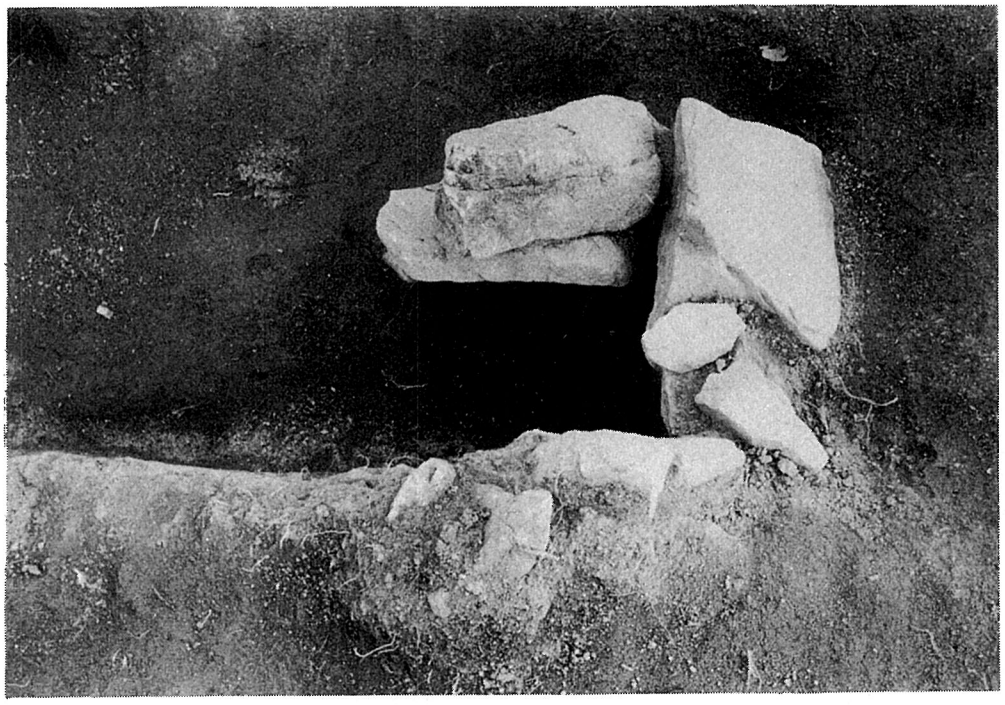
2.　空長第２号墳墳丘裾（西側）須恵器出土状態

1.　空長第３号墳全景（調査前）

2.　空長第３号墳全景（調査後）

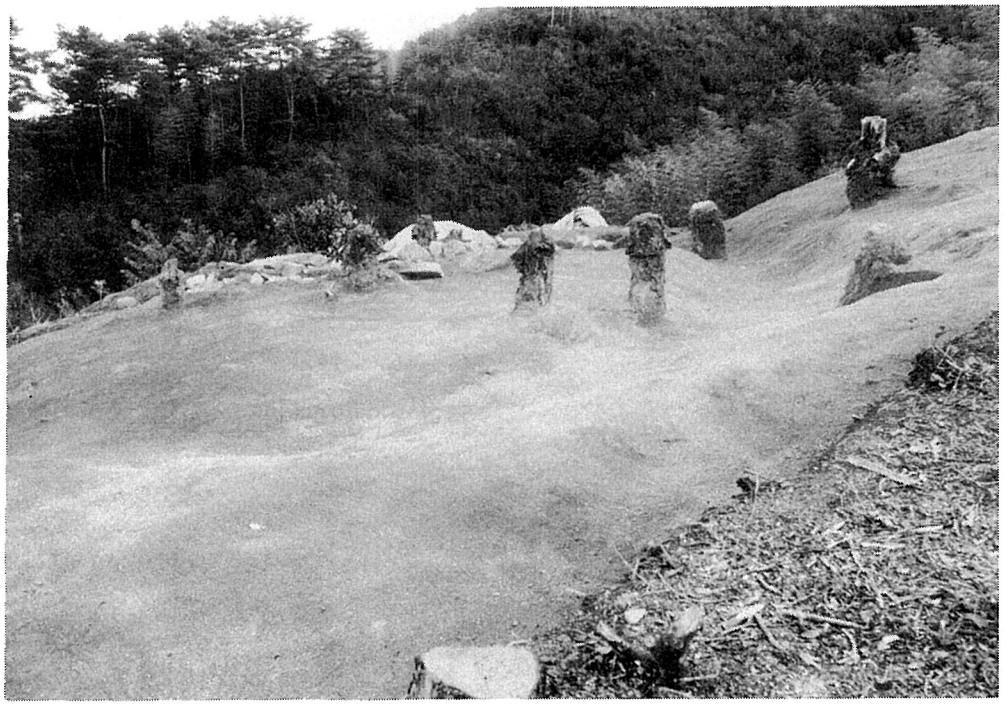


1.　空長第３号墳主体部全景



2.　空長第３号墳主体部残存状態

1.　空長第 4 号墳全景（調査前）

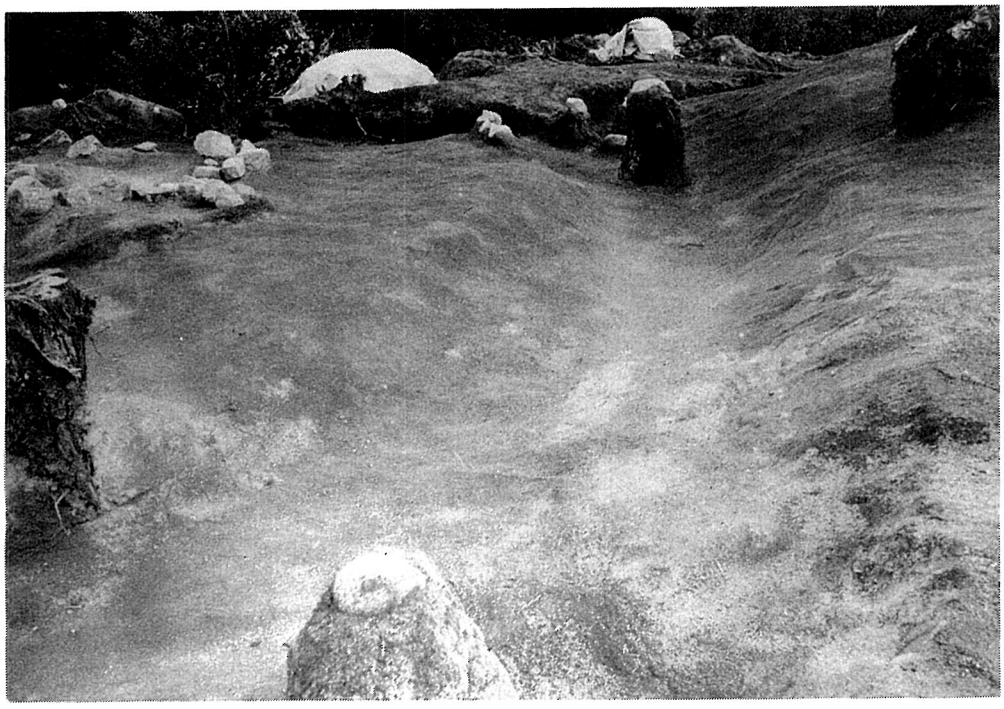


2.　空長第 4 号墳全景（調査後）

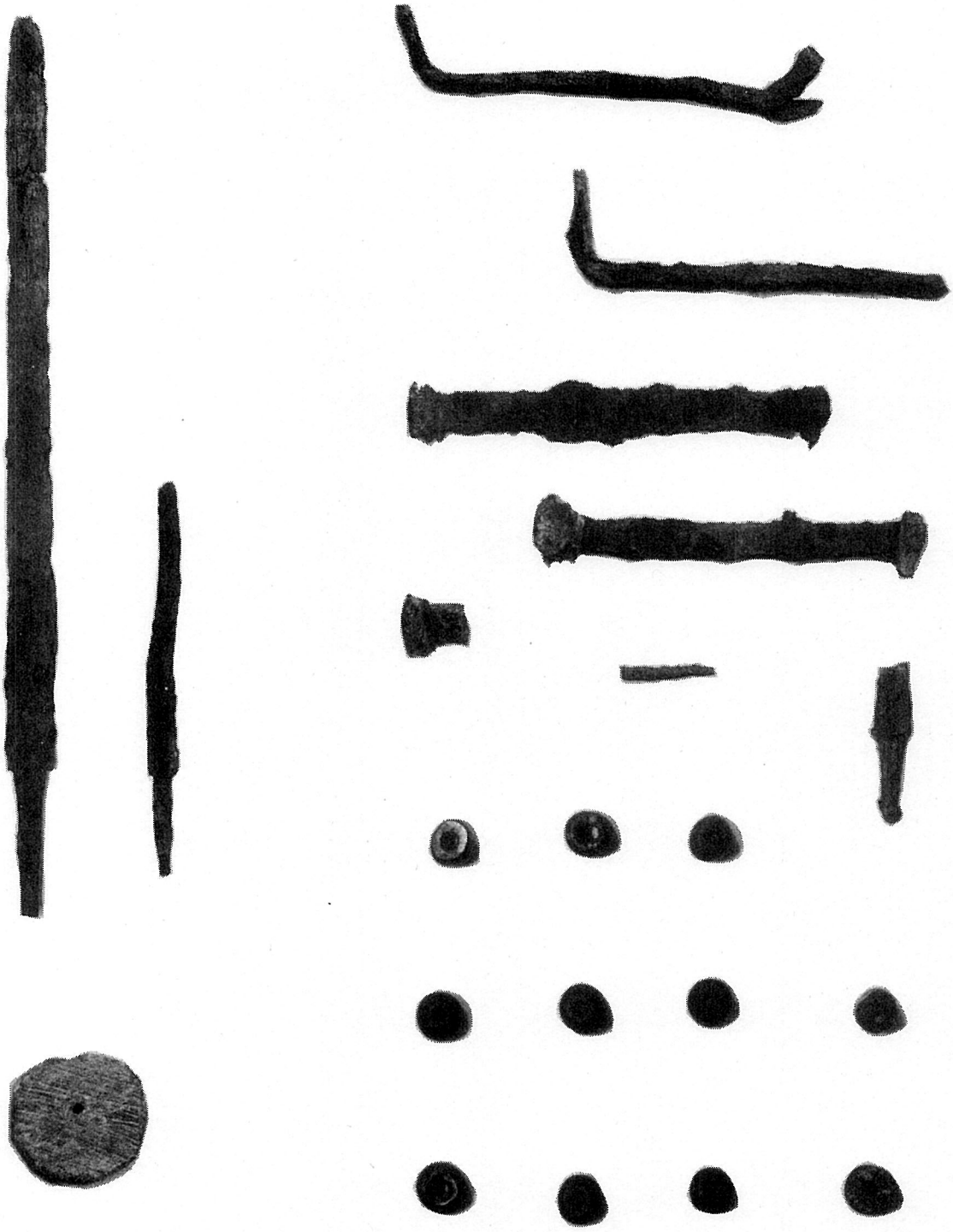
1.　空長第４号墳主体部全景

2.　空長第４号墳主体部内直刀出土状態

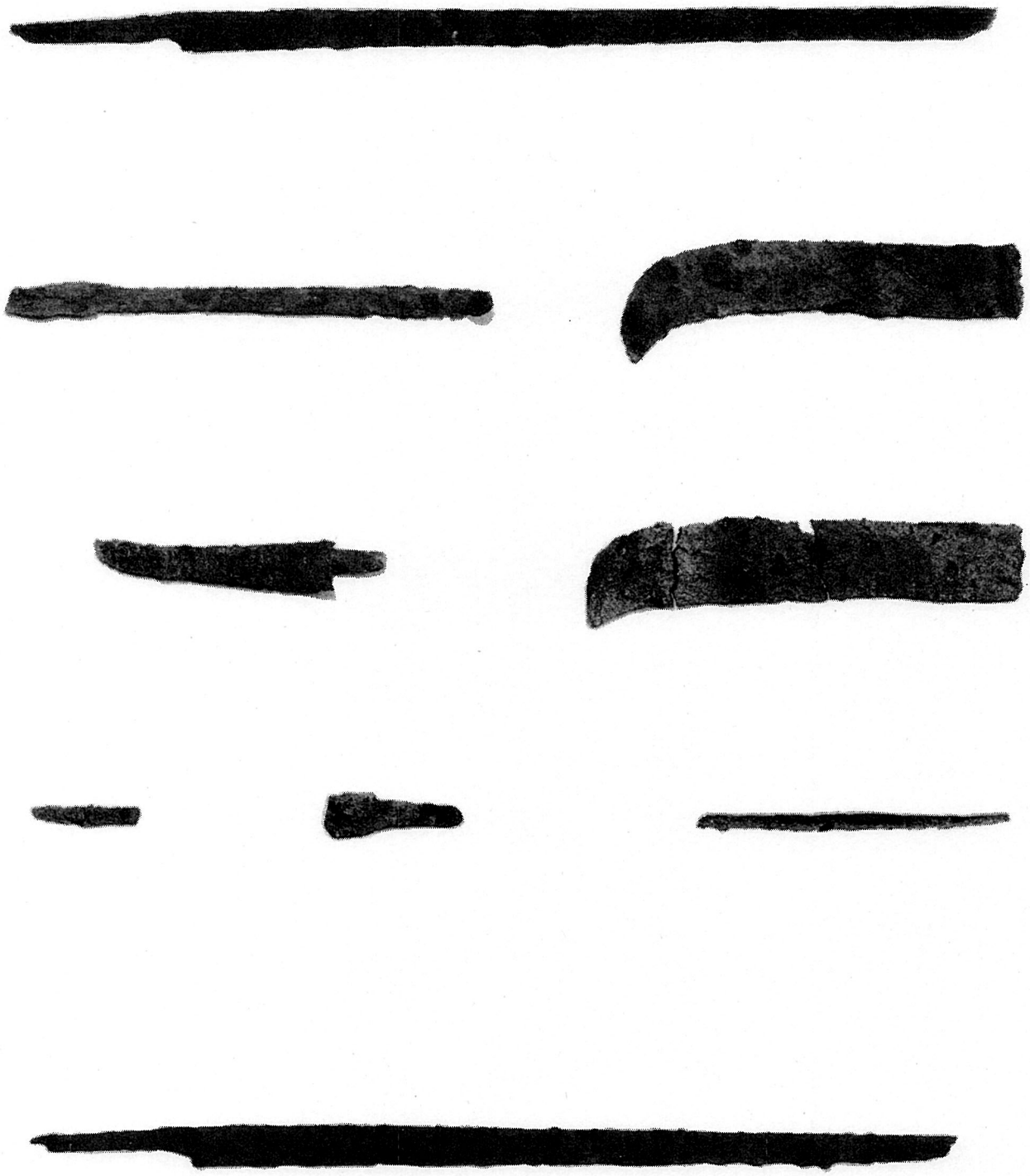
1.　空長第４号墳主体部の横口部積石状態



2.　空長第４号墳周濠（西側）



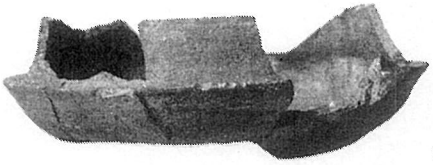
第１号墳出土遺物



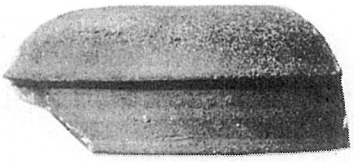
第２号墳・第４号墳出土遺物

1
(1)

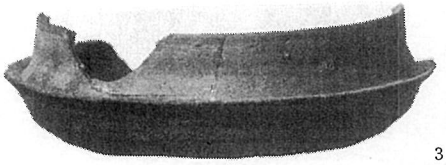
4
(6)



2
(3)

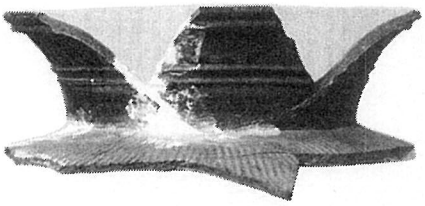


5
(8)

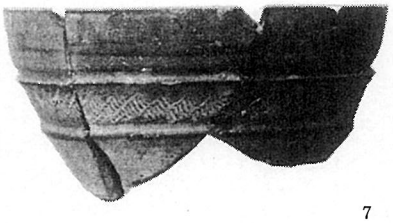


3
(4)

6
(9)



8
(11)



7
(10)

9
(12)

（　　）内の番号は付表５の対照番号

縮尺不同

空長古墳群出土須恵器

広島市の文化財第13集

空長古墳群発掘調査報告書

1978.3.31

編集
発行　広島市教育委員会（社会教育課）
広島市国泰寺町1－6－34
TEL　45－2111（代）

印刷　有限会社　清　弘　社
広島市本川町2－3－8